

写真新世紀

Vol.25 / 2010年度 (第33回公募)

WINNERS

Grand Prize

Karen Sato

Excellence Awards

Harumichi Saito

Shibata Sumi

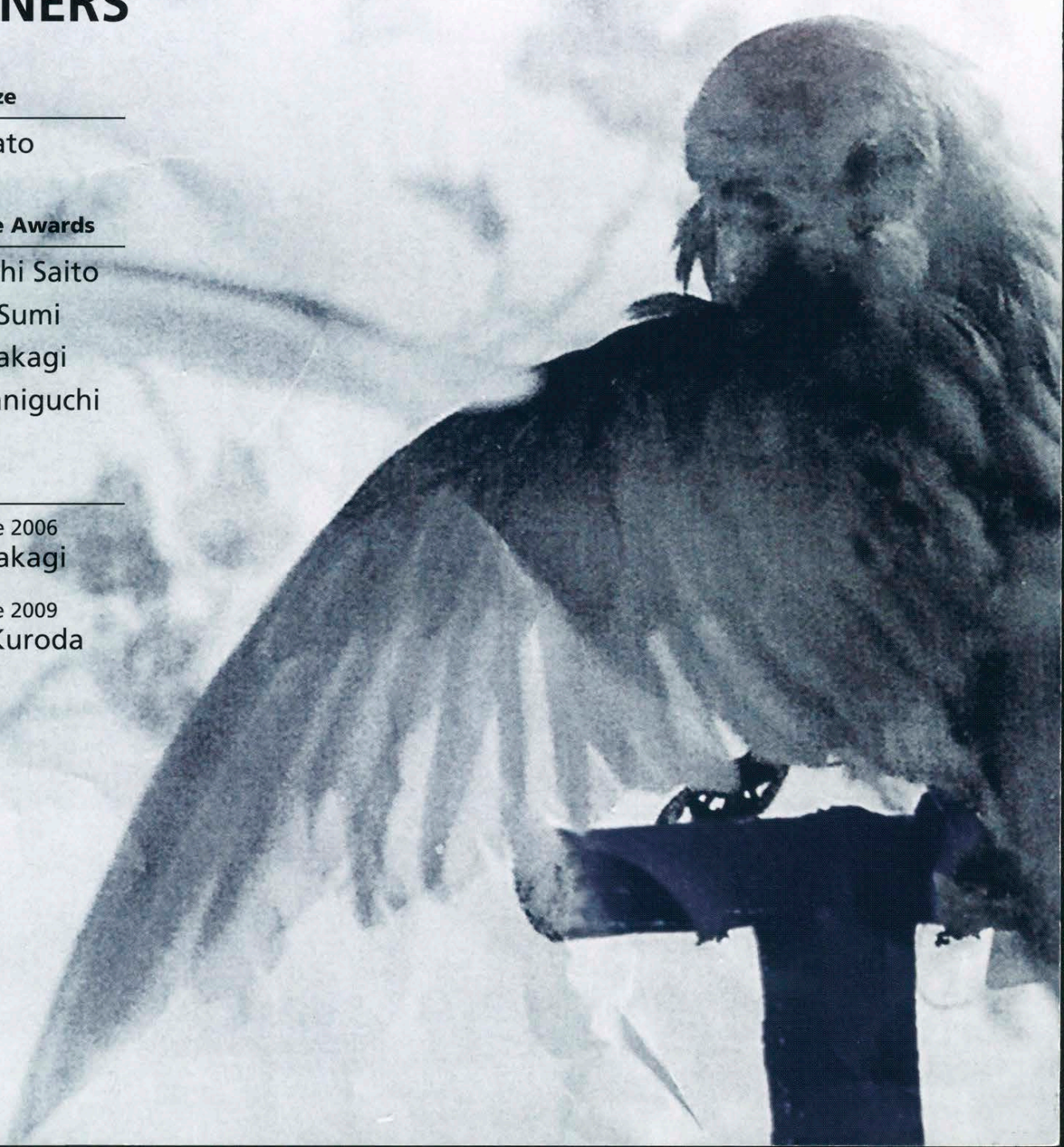
Koichi Takagi

Ikumi Taniguchi

Portfolio

Grand Prize 2006
Cozue Takagi

Grand Prize 2009
Misato Kuroda



写真新世紀

New Cosmos of Photography 2010 vol.25

写真で何ができるだろう？

写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する
新人写真家の発掘・育成・支援を目的に
1991年にスタートしたキャノンの文化支援プロジェクトです。
公募形式のコンテストによる新人写真家の発掘に始まり、
受賞作品展の開催や受賞作品集の制作、ウェブサイトでの情報発信など、
受賞者の育成・支援活動を総合的に行なっています。
作品サイズ、形式、点数、年齢、国籍など、
応募制限のないこのコンテストは、銀塩・デジタル写真を問わず、
自由で独創的な写真表現を応援しています。
これまでの20年間、2010年度の審査員である大森克己氏や佐内正史氏、
蟻川実花氏を始めとして、オノデラユキ氏や澤田知子氏など、
国内外で幅広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。
次代の写真表現を切り拓く写真家を輩出するために、
今後も写真新世紀は歩み続けます。

canon.jp/scsa

CONTENTS

02 はじめに ～写真新世紀について～

03 審査員プロフィール

04 優秀賞選出審査会総評

2010年度(第33回)
06 グランプリ選出公開審査会報告

グランプリ
08 佐藤 華連

優秀賞
16 齋藤 陽道
22 柴田 寿美
28 高木 考一
34 谷口 育美

40 佳作

2006年度グランプリ
50 高木 こずえ

2009年度グランプリ
54 クロダ ミサト

58 審査員座談会

59 写真新世紀東京展2010開催報告

60 写真新世紀の歩み

写真で何ができるだろう？

写真でしかできないことは何だろう？

写真新世紀とは

写真が誕生して170年余り、「写真新世紀」も20年を越えました。

写真表現の新たな可能性を挑戦する新人写真家たちの発掘・育成・支援を目的とし

自由で独創的な写真表現を生み出す写真家たちのために、

作品サイズ、形式、点数、年齢、国籍など、応募制限のないこのコンテストは、
銀塩・デジタル写真を問わず、新しい写真表現の可能性を生み出しています。

また、受賞後には、受賞作品展の開催や受賞作品を紹介する冊子の制作、ウェブサイトでの情報発信など、
さまざまな視点から、受賞者の育成・支援活動を総合的に行っています。

写真新世紀の歩み

1991年に年4回の公募で始まった写真新世紀は、1994年から年2回、2002年から年1回の公募に集約され、今年で33回目となります。応募者数も毎回1,000人を超えるまでに成長し、オノデラユキ、大森克己、HIROMIX、佐内正史、野口里佳、蛭川実花などを始めとする国内外で幅広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。

写真新世紀の審査の流れ

33回目となった2010年度の公募は、3月に審査員の発表とともに公募実施のアナウンスをし、4月中旬から6月中旬まで応募を受け付けた。1,276名からの応募を受け、7月キヤノン株式会社下丸子本社で行われた「優秀賞選出審査会」において、審査員による厳正な審査のもと、審査員ごとに優秀賞および佳作を選出した。そして、11月に写真新世紀東京展2010が開催され、その会期中に行なわれた「グランプリ選出公開審査会」において、優秀賞受賞者5名の中からグランプリ受賞者が決まった。



審査員プロフィール

2010年度(第33回公募)

審査員：大森 克己、佐内 正史、榎木 野衣、清水 穰、蛭川 実花

大森 克己 おおもり かつみ

写真家。1963年生まれ。兵庫県出身。日本大学芸術学部写真学科中退。フランスのロックバンド「Mano Negra」のラテンアメリカツアーと自身の旅の軌跡を一冊にまとめたポートフォリオ「GOOD TRIPS, BAD TRIPS」が、1994年度(第9回公募)写真新世紀において2人の審査員、ロバート・フランク氏、飯沢耕太郎氏に選ばれ優秀賞を受賞。以後、写真集、展覧会、スライドショーで作品を発表し続けている。主な写真集に「サルサ・ガムテープ」(1998年 リトルモア)、「Encounter」(2005年 マッチアンドカンパニー)、「サナヨラ」(2006年 愛育社)、「Incarnation」(2009年 マッチアンドカンパニー)など。

佐内 正史 さない まさふみ

写真家。1995年度(第12回公募)写真新世紀優秀賞受賞。常に写真の時代をリードし続け、出版した写真集は多数。2002年写真集「MAP」で「第28回 木村伊兵衛写真賞」受賞。2008年に写真集レーベル「対照」を立ち上げ、2009年12月にその第9弾写真集として「Custom Chair Album」を発売するなど精力的に活動中。

榎木 野衣 さわらぎ のい

美術評論家。1991年に刊行した最初の評論集「シミュレーションイズム」が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また主著「日本・現代・美術」では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみせた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた「戦争と万博」など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。

清水 穰 しみず みのる

写真評論家。1963年生まれ。東京都出身。1995年頃より現代美術、現代写真を中心に批評活動を展開している。1995年「不可視性としての写真：ジェイムズ・ウェリング」で第1回重森弘滝写真評論賞受賞。主な訳書に「ゲルハルト・リヒター写真論／絵画論」(1996年 淡交社)「シュトックハウゼン音楽論集」(1999年 現代思潮新社)。著書に「永遠に女性的なる現代美術」(2002年 淡交社)、「白と黒で、写真と・」(2004年)、「写真と日々」(2006年)「日々は写真」(2009年、以上、現代思潮新社)がある。

蛭川 実花 にながわ みか

写真家。1996年度(第13回公募)写真新世紀を受賞。2001年「第26回 木村伊兵衛写真賞」等数々を受賞。2007年に公開された映画「さくらん」では監督を務める。個展「蛭川実花ー地上の花、天上の色ー」(2008年、東京オペラシティアートギャラリー)を開催しその後全国を巡回。2009年12月には約16万人の動員を記録した。最新写真集は、ART BOOKのジャンルにおいて世界最高峰の出版社Rizzoli New Yorkから写真集「MIKA NINAGAWA」を出版。花や金魚、国内外の俳優、モデル、アーティストたちのポートレート、世界中の旅の写真、そして最新作「ノワール」のシリーズまで収録したベスト盤。

2010年度(第33回公募)写真新世紀 優秀賞選出審査会総評

7月中旬、キャノン株式会社下丸子本社にて、
2010年度写真新世紀の優秀賞選出審査会が行なわれました。
今年は1,276名の方からのご応募があり、
厳正なる審査を経て、優秀賞5名、佳作20名が決定しました。



左から榎木野衣氏、蜷川実花氏、清水穰氏、佐内正史氏、大森克己氏

審査員

2010年度(第33回公募)

審査員:

大森 克己 写真家

佐内 正史 写真家

榎木 野衣 美術評論家

清水 穰 写真評論家

蜷川 実花 写真家

大森 克己 評

「もっとゴージャスなものをみたい」

映画を見たりデートをしたり、誰もがふだん、いろんな体験をしているだろうけど、それより断然すごいなと思える作品を見たかった。「ああ、こんな世界があるんだ」と写真で示してほしいと期待していました。そういうものはなかなか見つからなかったというのが正直なところ。動画投稿サイトのYouTubeってありますよね。あれを見ているのと同じような気分になってしまう作品がちょっと目立ったかな。よく編集されているけど、だれかが整えたフォーマットに疑いもなく乗っていて、どこかで目にしたことのあるようなものだったりする。「きれいにまとめよう」「ほどよいところに落とし込もう」という気持ちが強いですかね。とくにブック形式の応募作品はそういう傾向が目立ちます。優秀賞に選んだ作品は、まとまりなんて気にせずジャンジャン撮っている感じが伝わってきてよかったです。世の中の流れを反映して貧乏くさくなるより、ゴージャスなものをもっとたくさん見たいと思いますね。

佐内 正史 評

「勝負する部分を定めてほしい」

いったん見終わってから、もう一回もっとよく見てみようと思ってページをめくりたくなるとか、その作品が置いてあったところにわざわざ戻って見るとか、そういう写真があればいいかなと思って選んでいました。戻ってもう一回見てみると「閉じちゃう」ような作品もあるから、難しいところですけど。全体的には、もっとストイックなものとか、「これ、どうしようもないな」っていう写真があればと思ったんですけど、そういうのはなかなか探し出せなかった。そこそこきれいに仕上げている作品が多いんだという感じ。整えて見せるか、少しも整えないかはどちらでもいいんですよ。でもそこが中途半端になっちゃったら、ずっと見ていたいと思える写真になるわけではない。応募してくる人は、「ここで勝負するんだ」というところを決めて、狙いを定めてきてほしい。こっちをバキバキにだましてやろうっていうくらいの気持ちで出してくるといいんじゃないですか。

榎木 野衣 評

「表現の多様性を感じました」

写真のコンペですから、ここには写真作品しかないわけですね。それでも絵画、彫刻、インスタレーションなど何でもありの美術のコンペと比較しても、かえて表現の多様性を感じました。写真でなければ駄目だというのではなく、自分がやりたいことを実現するために写真を選択している人が多いのかなという印象です。つまり、写真を撮ることが目的化しているのではなく、自分の表現のために写真を選び取っている。そこは肯定的に受け取りました。新しい動きというのは、案外そういうところから生まれるものではないかと感じるからです。審査の際には、あれこれ考えて言語化したりはせず、ひたすら無意識的に見て感じ、心の奥底にあるアンテナに引っかかったものを選ぶようにしました。そのほうが、現状の判断基準や枠組みに捉われないものを見つけられるのではないかと思ったので。反面、写真であることに寄り掛かるような表現には魅力を感じませんでした。写真の可能性だけではなく、芸術そのものの器を拡げてくれるような志向が、結果的に写真の未来をつくり出していくのではないのでしょうか。

清水 穰 評

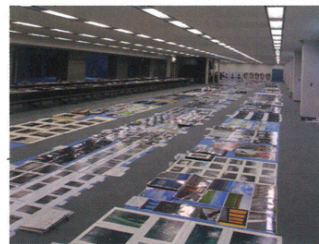
「思い込みだけを見せられても困るのです」

応募作品を見渡すと、流行のようなもののはっきり見受けられますが、基本的には、どれもとてもうまいと思いました。審査にあたっては、作品を3つの「ふるい」にかけて選んでいきました。まず、いくらかのグランプリが恋人を撮ったものだったからといって、身近な一人の人物を撮り続ける作品が多すぎる。思い込みだけを見せつけられても困るのです。次に、淡いコントラストでフワッとやががかって、乳白色の世界を演出した写真、つまり生命保険のCMの色味の作品は通俗です。さらには、日常をデジタルカメラで切り取って、それなりに面白い構図にしかたの作品もよくない。日常やデジタルがいけないのではなく、目を向けるところがみな同じなのです。洗濯物とか、路上の小動物の屍骸、降ってくる雪などが頻出する。これは自分の目でものを見ていない証拠です。結局消去法で、これらに当てはまらない作品から選んでいきました。新しい現象もありましたね。今はデジタル技術が進展して、動画と静止画の区別がなくなってきた、そんな時代に、どういふ写真を撮るかを考えた作品が、いくつか見つかりました。

蜷川 実花 評

「個人的な視点で選びました」

「いい写真」って何なのか。それを定義するのは難しいです。審査をしていて、基準をどこに置けばいいか考えさせられました。とはいっても、写真を見るときにはまず自分の考えや好みに照らしていくのが当然。だから今回は、徹底して個人的な視点で作品を選びました。終えてみて、私はやっぱり素直でストレートな写真が好きだと改めて気づきました。「きれい」「うまい」「気持ちがいい」ものはやっぱりいい。単純すぎるかもしれないけれど、そういう当たり前のよさは積極的に認めたい。私が応募していた頃に比べれば、全体的に写真もまとめ方もぐっと上手になっていますね。奇をてらったり、抜け穴を探しているような作品は選ぶ気になれませんでした。「新世紀」とタイトルにあるから、新しいことをしなければと考えるとうんどうか。題材や手法が新奇なら新しい作品になるとはかぎりませんよ。それより私は純度の高さに惹かれますね。優秀賞は格好の例です。女子高生の学校ライフなんて目新しくないけど、純粹に研ぎ澄まされた当事者の視線が貫かれているからこそ面白かったんです。



2010年度(第33回公募)グランプリ選出公開審査会報告

2010年度(第33回公募)グランプリ選出公開審査会が、11月19日(金)に東京都写真美術館1階ホールにて行われました。優秀賞を受賞しグランプリ候補となったのは、齋藤陽道氏、佐藤華連氏、柴田寿美氏、高木考一氏、谷口育美氏の5名。候補者全員のプレゼンテーション、審査員との質疑が行われた後、審査員による合議によって佐藤華連氏がグランプリに決定しました。

2010年度写真新世紀グランプリは、佐藤華連氏に決定!

グランプリを受賞した佐藤華連氏は、受賞の挨拶で「本当に信じられないです。作品を見てくれた方が言葉をかけてくれるだけでもうれしいのに、こんなに評価していただけるなんて。自信になりました」と喜びを語りました。



グランプリを受賞した佐藤華連氏



グランプリ選出公開審査会の様子。向かって左がグランプリ候補者、右が審査員



左から齋藤陽道氏、柴田寿美氏、高木考一氏、谷口育美氏

公開審査会の様子

満席の会場の中で開かれた公開審査会は、各候補者が5分間のプレゼンテーションをした後に、審査員との質疑応答という形で進められました。しっかりと準備してきた言葉を堂々と述べるプレゼンテーションは、どれも聞く側を惹き込むものでした。作品の意図や優れた点をより探ろうと、審査員はさまざまな角度から質問をぶつけました。

最初にプレゼンテーションしたのは齋藤陽道氏。自身もろう者であるという立場から、これまでの障がい者を扱った写真作品には不満があったとのこと。狭く窮屈なイメージのものが多く、見る側が関わりを持ちづらいのではないかと感じ、そこで自分としては、「障がい者の世界を撮るだけでなく、動物や人種、あらゆる世界が並列になったものを撮りたいと考えました」と説明。タイトルに同類という言葉を用いたように、「すべてのものに共通した“いのち”のような、根本に立ち戻るものを作品として表しました」と熱く訴えました。

続いて佐藤華連氏がプレゼンテーション。人に合わせ己を捨てて生きていた時期の自分を、写真によって見つめ直したのが受賞作品であり、

「この『だっぴがら』という作品は、現実逃避と自己否定をして大人になった今の私の姿です」と説明。続けて、「時間、社会、環境に唯一束縛されず、自由であるのがイメージの世界。イメージすることをやめず、写真にしてい、そこに私が私である意味がある」と制作に向けた気持ちを語りました。衣類や器などを撮った写真が多いものの、「写真で自分の姿を残すより、ずっと私らしい私を写真にできたので、この作品をセルフポートレートと位置付けました」と、作品に込めた思いを整然と語りました。

柴田寿美氏の作品は、高校時代のクラスメイトを被写体としたもの。撮影をしていたときは、「小鳥をつかまえてカゴに閉じ込めておくような、またハンティングをしているようなイメージがありました。時間をそのまま残しておきたいと思ったので」と、作品のねらいを話しました。飾らない表情の親密な写真が多いのは、「仲のいい間柄でないと見せてくれない表情があって、そういうものを撮れたらと考えました。撮影することそのものが私にとってはコミュニケーションでした」と、自分の言葉で丁寧に説明しました。

「流体力学の用語で、流れがぶつかったときに

できる境目のこと」と、タイトル「Fluid Film」の解説から話し始めたのは高木考一氏。炎や月、暗闇にたたく人物など一枚ずつの写真は、境界を撮っている感覚があるのだといいます。展示は写真を壁に立てかけたりピンで留めたりとさまざまな手法を駆使。「空間を創りたいと考えた結果です。見る人の位置や角度によって見方が変わってくるような展示ができないかと思いました」と、自作に込めた思いを熱心に話しました。

最後は谷口育美氏。大量のモノクロ写真で構成された作品は、東京新宿・歌舞伎町のキャバクラで働きながら同僚や街の様子を撮ったもの。写真家・渡辺克巳氏が撮った新宿写真に憧れて、自身も新宿を写真にしてみたものの、「表面的なものしか写らなかったのもっと中から覗きたい」と、半年間、歌舞伎町で働いて撮影した、と語りました。「何もかもが新鮮で、目に映るものすべてにシャッターを切っていました。展示は、自分がそこにいたことを形にしたいと思い、歌舞伎町の地図の形に写真をはめ込みました。」と、作品展示に込めた思いを説明しました。

こうして5人それぞれに、工夫を凝らし個性を發揮したプレゼンテーションが終わりました。

グランプリ選出審議から発表まで

グランプリ選出会議の様子

プレゼンテーションと質疑応答が終わった後、審査員は別室に移り、グランプリを選出する議論を交わしました。応募作品や展示の印象、プレゼンテーションで語られたことを総合的に考え、審査員それぞれが自分の推す候補の長所をアピールしました。重視すべきは受賞作品の完成度か将来性への期待か、またグランプリ作品としてふさわしいのはどういう作品かなど、多角的な視点から話し合いが続きました。予定時間をオーバーするほど白熱した議論が続いた後に、作品完成度も将来性も併せ持つ佐藤華連氏がグランプリに選出されました。

表彰式～グランプリ受賞者のコメント

表彰式では、キヤノン株式会社コーポレートコミュニケーション推進部担当部長の澤田澄子

が、まず佳作受賞者20名を代表して澄毅氏に表彰状と奨励金の目録を授与。続いて優秀賞5名それぞれに表彰状と奨励金の目録を授与しました。そして、緊張感が高まる中、グランプリ受賞者の発表へと移り、佐藤華連氏の名が会場に響きました。佐藤氏には表彰状と奨励金の目録、および副賞としてキヤノンデジタル一眼レフカメラEOS 5D Mark II EF24-105L IS Uレンズキットが授与されました。

グランプリを受賞した佐藤氏は、発表を聞いた瞬間には心から驚いた様子。感想を促されると、「本当に信じられないです。今までで一番うれしい。作品を見てくれた方が言葉をかけてくれるだけでもうれしいのに、それがこんなに評価していただけるなんて。自信になりました。これからはがんばりたいです。」と話し、会場から賞賛の大きな拍手がわき起こりました。



グランプリを受賞した佐藤華連氏



受賞のコメントを述べる佐藤華連氏

審査員総評

表彰式の後、審査員から総評が述べられました。大森氏は開口一番、「選ぶのは難しかったです」とコメント。「いい写真であるのかな、とか、新しいことと古いことって何かとか、色気があるかないとか、そんなことを議論しながら考えました」と、議論の行方が多岐にわたったことも説明。「自分が賞をいただいたときのことを思い出したりもしました。この後にどう生きていくかが大変なことだし、楽しいことでもあるんじゃないでしょうか」と、受賞者をいたわりました。佐内氏も「みんなよかったです」と、まずは受賞者を称えながら、「自分も受賞者だったから、この審査の場は実家っぽい気持ちがあります。佐藤さんが選ばれることになったのは、どこか実家っぽい雰囲気が作品にあったからかもしれません」と審査結果を分析しました。「グランプリを決めるのに、かなりいろいろ話をしました。それは裏返すと、突出した存在がなかつ

たから」とは榎木氏。「その中で佐藤さんが選ばれたのは、自分に引き付けた話をしていて、本人が写真といろいろな関係を結んでいることがよく分かるのがよかったのではないのでしょうか」と話しました。清水氏は「誰にグランプリを渡すかというのは、一種の賭けのようなものです。というのは佳作以上にはほとんど差がないからです。そういう意味で、グランプリの佐藤さんの責任は重いともいえ

る。これから先、がんばらないといけない。次のステップを楽しみにしています」とエールを送りました。蛭川氏は、話し合いの過程で齋藤氏、佐藤氏、谷口氏が僅差で競ったことを明かしたうえで、「優秀賞とグランプリの間に差はないです」と指摘。「佳作の人も含めて、問題はここから先。いくらでも“跳ねる”ことはできるはずなので、ぜひがんばってください」と、受賞者全員に言葉を贈りました。



各審査員が最後に総評を語った



表彰式の後、記念撮影

2010年度(第33回公募)
グランプリ 清水 穰 選
佐藤 華連
「だっぴがら」





2010年度(第33回公募)グランプリ

佐藤 華連 インタビュー

ていねいに写し取られた静物写真の数々。どれも落ち着いた雰囲気をたたえているが、同時に画面には、力強いメッセージが含まれているとも感じられる。被写体のモノに託して写したのは、作者自身の姿だった。

これがわたしのセルフポートレート

——タイトルの「だっぴがら」とは不思議な言葉です。何を表しているのでしょうか？

作品のテーマを言葉にするとしたら、「成長」です。以前から私は、人と合わせることばかり考えて生きてきた、そんなコンプレックスを持っていました。いつだって自分を他人と比べてばかりいたり、外からの影響にすぐ振り回されたり、それで自分の意見もころころと変えてしまったりしていました。本当の気持ちを抑え続け続けていて、いつだって自分というものがないというか。たしかに生きていくうえでは協調性というものが大切なかもしれないし、とき

にはそうやって自分を抑えられることが評価されることもあるでしょう。ひょっとすると、自分を抑えて、周囲とうまく合わせられるようになることを、成長と呼んだりするのかもしれないと考えもしたり。

だとしたら、成長をしていくうえで何度も脱皮して、そのつど脱ぎ捨ててきた私の「だっぴがら」こそが、私そのものなんじゃないか。そう思い至りました。脱ぎ捨てた「だっぴがら」は、今ならまだ頭のなかに残っている。そこで、それらの「だっぴがら」をひとつずつ、写真の形にして作品にしようと考えました。だからこれは、私のセルフポートレートです。自分が写っている写真は一枚もないけれど、間違いなく私の

ポートレートなんです。人に合わせることばかりで、自分を自分として実感できていなかった私が、いくら自分の外見を写したとしても、それはセルフポートレートになつてなりません。それよりも、頭のなかにある「だっぴがら」を撮ったほうが、ずっとセルフポートレートとして成立するはずだと考えたんです。

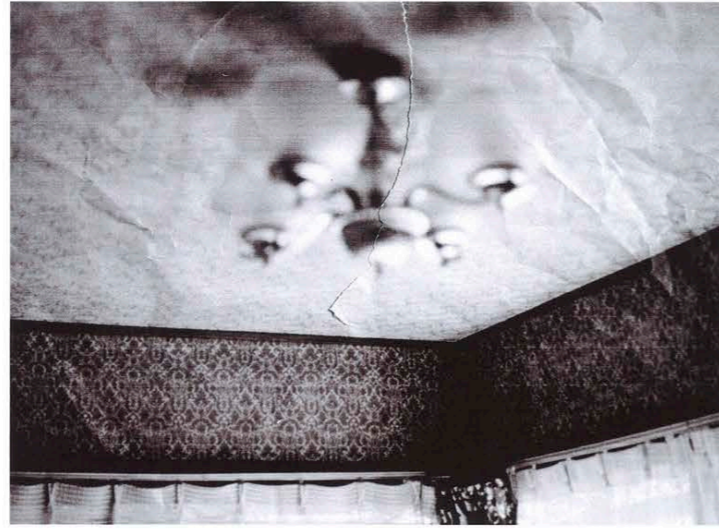
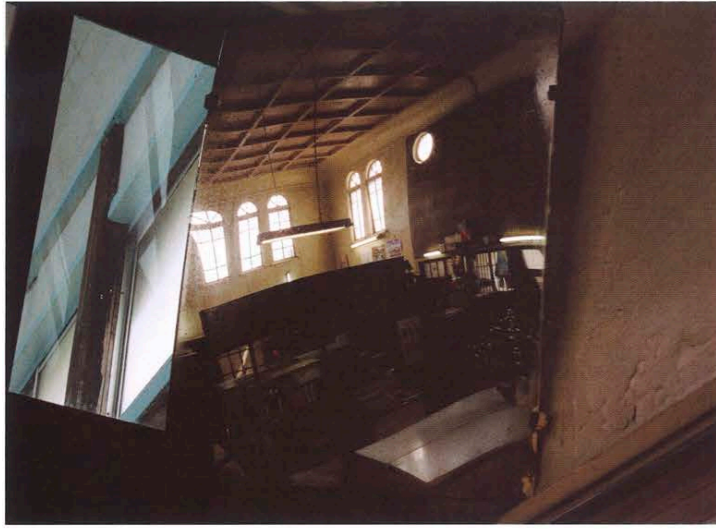
——作品の撮影はどこで行われましたか？被写体にはどんなものを選んでいるのですか？

撮影場所は祖母の家や自宅などです。服が何枚も被写体になっていますが、それは祖父が昔着ていたパジャマや、母のワンピースなどですね。服というのは、まさに「だっぴがら」そのもの

のだと思って撮りました。ほかにも鳥の剥製や、人が寝ていないベッド、鏡などがありますが、そうした被写体のどれもが、カラッポやニセモノで「だっぴがら」という自分に繋がっています。

——カラーとモノクロが混在したり、写真のコピーを再撮影したりと、さまざまな手法を使って作品を仕上げていますね。

そうですね、ふだんはカラーで撮影することが多いのですが、この作品にはどうしてもモノクロを入れたいと思いました。これまでの自分の記憶を思い返そうとしてみると、私はたいていうまくできない。頭のなか鮮明な像を結べないんですね。ほんの断片しか出てこなかつ



たり、勝手に変形されていたり、部分的にしか見えなかったりといったことばかりで。匂いや温度だけがよみがえってきたりすることもある。そういう記憶の不完全さを表すには、コピーやモノクロがぴったりだと思ったんです。

写真をいったんモノクロでコピーして、そのコピー紙を撮影しているものもあります。そういう作業を経ると、撮ったままの写真とはずいぶん見え方が変わります。モノクロコピーにすると、何かそぎ落とされた感じがするし、ざらついた「雑」な質感を持たせることができます。

それは、私の中のある種の記憶に近い感覚なんです。

ほかにも、写真をコピーして、その紙をいったんくしゃくしゃに丸め、それをまた広げて撮影したものもあります。こうすると、変形してしまった私の記憶や、思い出をあまり鮮明に覚えていないことを、うまく表せるんじゃないかと考えたんです。そういえば、コピー紙を半分くらい破って撮影したものもありました。これは、自分の薄っぺらさや記憶すら思考でコントロールしてしまえるという事を表しているんです。

作品も自分の言動も律したい

——写真を始めたのはいつからでしょうか？

写真の専門学校に入ってからですね。高校の頃から写真やカメラは身近にある世代というもあり、なんとなく、徐々に興味を持つようになりました。でも、簡単な機能のカメラの使い方すらよくわからない状態でした。いざ、本格的に学び始めると、写真は楽しく、自分にとても向いたツールであると分かりました。写真の面白さは、作品を作る過程で、自分自身に疑問を投げかけ

られるところ。写真を撮ってなければ、自分で自分に対して何かを問うなんてことはまずないので、とても貴重な機会になりますよ。自分で投げかけた問いに対して、作品をつくることで答えを導き出せたりもしますよね。今回の「だっぴがら」では、自分なりの答えをちゃんと示すことができたんじゃないかと思っています。

——自分で自分に問いを投げかけた作品で、みごとグランプリを獲得しました。結果は予想していましたか？

本当にまったく、選んでいただけるなんて思ってもいませんでした。ひたすらびっくりしました。グランプリはまずないだろうと思っていたので、公開審査会のずっと前から、来年の制作のスケジュールをみっちり考えていたくらいです。グランプリ発表で自分の名前が呼ばれたときは驚くばかりで。ただ、受賞してしばらく経つと気持ちが改まって、しっかりやらなければと思うようになりました。人に作品を見てもらえることのありがたさを、身にしみて感じますね。1年後に個展という場も与えていただけるわけですね。ま

た発表できるチャンスが訪れるなんて、とてもうれしいことです。そういう幸せをかみしめていたら、表現をすることだけはやめない、何があっても続けていくんだという決意が自分の中で固まりました。これから進めていきたいテーマとしては、「客観視」「時間の感覚」「自由と不自由」「住むこと」などすでにいくつも浮かんでいます。自分の頭の中のそうした考えを、しっかり形にしていきたい。作品だけじゃなくて、自分自身も律しないといけませんね。普段の言動にもっと責任を持ち大事にしていこうと思っています。



受賞者コメント

私は、私らしいということが分かりません。
 毎日毎日同じことの繰り返し、同じところで同じことをして、私は歳をとっていきます。
 そのたびに、大事な何かが削り落ちていってしまうような気がしています。
 今の私に何が残っているのか、ときどき怖くなります。
 セルフポートレートとは、自分を写真に写す行為ですが、自分を写したところで私を感じることが自分自身できなければ、それはセルフポート

レートとは言わないと思います。
 自分がいた事を表す手段だとしても、私にとってそれはあまりにも可笑しなことです。
 では、私を証明するには、私に私を伝えるにはどうしたらいいのか。
 頭の中に答えがある気がします。
 「だっぴがら」は私のセルフポートです。



選: 清水 穂

制作意図に「ひきこもり」と書いてあるけど、そういう閉ざされた感性の鬱屈感が非常に生々しく出ていると思いました。写真でもビデオでもコピーでも、記録に残るものに対する愛憎、特に憎しみの方をすごく感じた。複写社会の中で、自分がなんて意味のない存在なんだろうという絶望が感じられる。例えば、写真を撮って、それをさらに複写して、もう一段チープにする。今私がここにいるということを感じようとしてなかなかできない社会の虚しさ。ピュアに暗い写真という感じがしました。



佐藤 華連 さとう かれん
「だっぴがら」
 ブック/大四切/30ページ/
 カラー印刷紙
プロフィール
 1983年 神奈川県生まれ
 2009年 早稲田大学芸術学校
 空間映像科写真専攻卒業

2010年度(第33回公募)

優秀賞 佐内 正史 選

齋藤 陽道

「同類」



2010年度(第33回公募)優秀賞

齋藤 陽道 インタビュー

静けさに満ち、同時に内に秘めたエネルギーが漂い出すようなポートレートが並んでいる。

その画面には、被写体を慈しむ撮り手の気持ちがあふれている。

音を知らない作者が作り出した、なんとも雄弁な世界がここにある。

命の根本について考えた

——「同類」と名づけられた作品は、どんな意図でまとめられたものでしょうか？

もともと障がい者を扱った写真にたいして不満がありました。モノクロ写真で重厚すぎたり、かと思えばその反動で、やたら笑顔で不自然なくらい明るい写真ばかりだったり。そこに違和感を覚えていました。それに、障がい者を扱った写真というのはどうしてもカテゴリー分けされてしまうことが多いですね。盲者なら盲者だけの写真、知的障がい者なら知的障がい者



だけの写真、というふうには。そこにも抵抗がありました。健常者と障がい者をもっと広くひっくりめたような作品をつくりたかった。そのため、命の根本について考えるべきだと思いました。いま、ここに命があるということは、その親がいたということで、その親にもまた親がいる……。いろいろなものが積み重なって、いまここに命がある。そう考えると動物も、人間も、虫も、あらゆるものは等しくなる。そういうことを織り込んだ作品をつくりたかったのです。

——被写体になっている人たちとはどこで出会っ

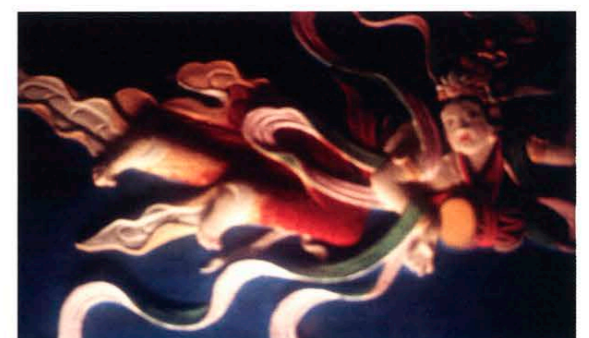
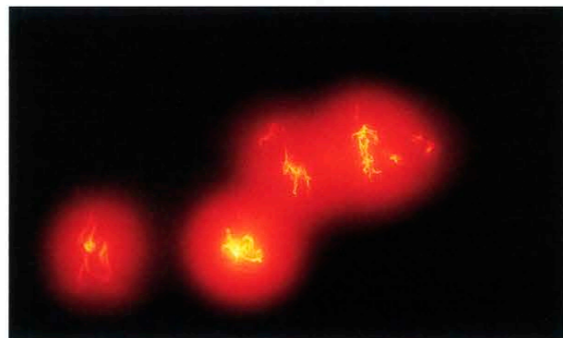
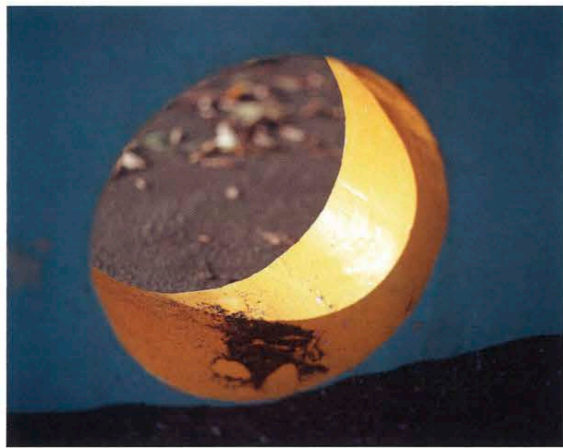
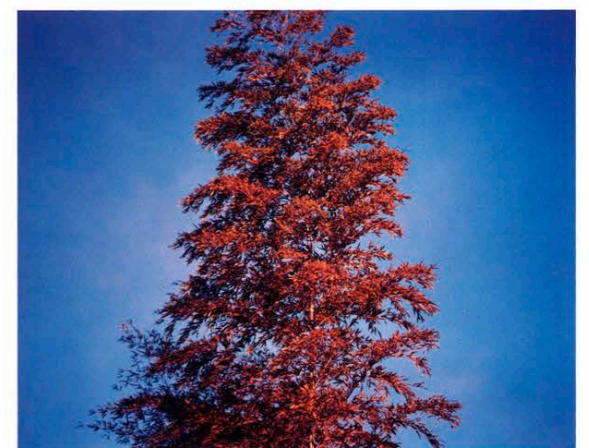
たのでしょうか？

自分も所属している障がい者プロレス団体「ドッグレッグス」の人たちに、被写体になってもらっています。そこには義足、うつ、ひきこもりなど、いろんな人がいて、みんなすごく魅力的なんです。制作期間は一年くらいですね。撮影自体はスムーズにいましたが、一番時間がかかったのはブックの構成でした。ただ順番に並べただけでは、よくある障がい者の写真にしかならないと思った。そこで動物、人間、異次元、この3つのテーマを意識して並べました。動物と人間はいいとして、異次元というのはちょっと不思議

に思われるでしょうか。これは、日常の中にふっと、どこか知らぬ異次元への扉がひらかれる瞬間があるんじゃないかと、自分自身がよく感じているのです。写真だと、その異次元の感覚をうまく捉えることができていると思っていて、異次元をイメージしたものをよく撮っています。

——佐内正史選だったことについてはどう思いましたか？

佐内さんの写真は前からよく見ていたのですが、自分にとってはずっと謎で、わからないものでした。でも岡本太郎美術館で開かれた大き



な個展を見に行ったときに、あっ、といきなりわかった感じがして、急激に好きになっていったところでした。今回そういう方に選んでもらったというのは、何とも不思議な気分です。

—ほかに好きな写真家や影響を受けた表現者はいますか？

写真家では荒木経惟さんに、大橋仁さん。このおふたりは、いつも直球で勝負していますね。目には見えないものも取り入れようとする僕の広さも感じます。それから、マイケル・ケンナや

マリオ・ジャコメッリも好きです。音が聞こえないおれですが、この写真家たちの写真をみると、もっと静かになる感覚に襲われます。

相手を思い尽くすこと

—写真を始めたのはいつからで、どんなきっかけがあったのでしょうか？

19歳のときに原付バイクで日本一周に出かけたことがありました。そのとき、レンズ付きフィルムで写真を撮っていたのですが、せっかくなら、もっときれいに撮ってみたいと思った。

それが写真を撮ろうと考えたきっかけです。そのあとで、ろう者の友人を撮影していたことがありました。出来上がってきた写真を見てみると、そこに写っているのは「ただの人」だった。「ろう者」が写ってはいなかったんです。そうか、写真っていうのは、真実を写すわけじゃないんだと実感しました。それなら、おれがろう者をろう者らしく撮ってやる。そう思って、本格的に写真を撮りました。

—自身が音を知らないことは、写真を撮るうえで

で影響がありますか？

音がない分だけ、良くも悪くも被写体そのものを見つめられるんじゃないか。そこは有利かなと思っています。会話できないのがすごく不利だというのはわかっているから、会話以外の部分でどう相手と向き合えるか、相手のことを感じられるかを、ずっと考えています。だから、撮影するときには時間をかけますね。車椅子の人を撮るなら、自分も車椅子に乗って一日を過ごしてみても、そこから得た感覚を忘れないようにしながら撮ります。盲の人を撮るなら、一

日ずっと目をふさいで過ごしてから、撮影をします。そうやって、できるかぎり相手のことを思い尽くすという方法によって撮っています。すごく時間がかかるし、不器用なやり方だと思うけれど、自分にとってはこのやり方がすごく合っているなあと考えています。

—相手を思い尽くすことは、写真に反映するのでしょうか？

はい、写真に表れているはずだと信じたいです。今回の作品の中に、逆光に人物が照らされ

ている写真があります。これはハンセン病の人を撮ったものです。最初に撮影をたのんだときには、いったん断られたんです。でも、どうしても撮りたいと思った。そこで自分なりに考えてみて、顔を克明に写されるのがいやなのかなということを思った。それならば、顔がはっきりと写らない形で、しかも写真としてきれいなもののできたらいいんじゃないかと考えて、この撮り方に行き着きました。こうやって相手のことを思い尽くしていく、それによって新しい撮り方ができるんだと思っています。



受賞者コメント

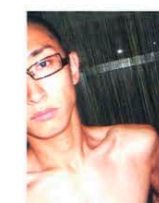
目の前にひとつのものがいる。
それがいるということは、かつてふたつのものが共によりそった結果だった。
ふたつのものもまた、昔、それぞれにふたつのものがいた。
それはどこまでもどこまでもさかのぼっていく。
そうして今、目の前にひとつのものがいる。
このあたりまえのことを徹底して思い入る。
目の前にいる存在を、孤高のひとつのものとして認める。
それ以上も以下もない。

ひとつのものとして生まれて消えていくからこそ、
もうひとつのものを欲し、探し、抱き、創ってきた。
とほうもない連なりの流れのまっただ中にあるものたち。
その事実においてすべては同類となる。

「おはよう。…。とてもいいねえ。わあ、かっこいいなあ。ありがとう。
きみを撮ることができてほんとうによかった。じゃ、また、いつかどこかで」

選: 佐内 正史

この人の写真を撮る態度がすごく好きですね。余計な要素がなく、
四隅からセンターにまっすぐ入っていくような写真。あんまりまっすぐ
な写真を撮るのは、難しいこと。この人は、まっすぐなときが多いんだ
ろうね。淀んでないし、透明感がある。それから全部の写真にスキが
ない。写真集の構成でも、最初の4点は、波打ち際のベビーカーの写
真が並んでいて、途中右ページだけに写真があったりするのが、無作為
なように見える。作為はあるんだけど、無作為に見える。すごくキレが
ある作品集だと思う。



齋藤 陽道 さいとう はるみち
「同類」
ブック/A4/45ページ

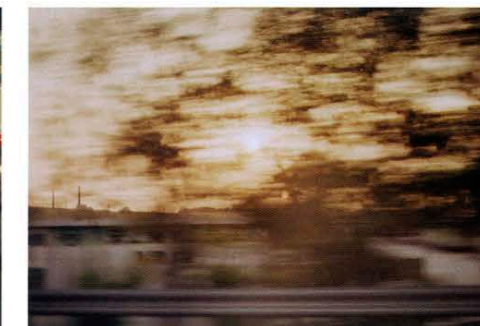
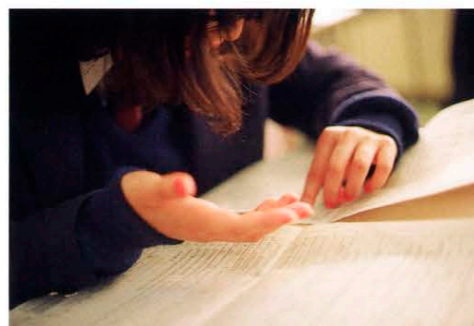
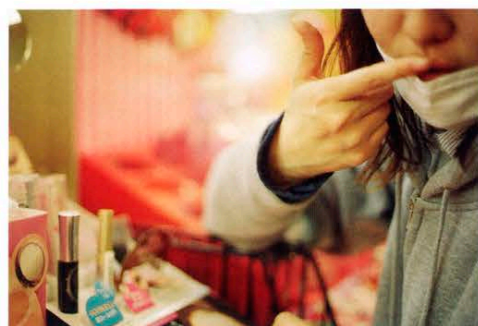
プロフィール

1983年9月3日 東京都生まれ
2004年 東京都立石神井ろう学校卒業
2009年 写真新世紀佳作「タイヤ」飯沢耕太郎選

E-mail: info@saitoharumichi.com
HP: http://www.saitoharumichi.com

2010年度(第33回公募)
優秀賞 蜷川実花 選

柴田 寿美 「beyond the universe」





2010年度(第33回公募)優秀賞

柴田 寿美 インタビュー

見ているだけで、にぎやかな笑い声が聞こえてきそう。女子高生たちの何気ない日常を、飾らぬ視点で捉えた瑞々しい写真が並ぶ。自身も同じ女子高生という立場だったからこそ掬い取れた情景だ。

被写体は同級生たちの自然な姿

—受賞作品はいつ、どこで撮ったものなのでしょうか？

2010年の春まで高校生でした。学校に行くときにはいつもカメラを持っていて、暇さえあれば写真を撮っていました。学校の中や登下校の途中で撮った写真ばかりをまとめたのが今回の作品です。被写体になっているのは、仲のいい友人たち。彼女たちのごく自然な姿がたくさん写っています。高校はすでに卒業してしまっているので、これと同じ写真はもう二度と撮れません。それにたとえば、だれかプロの写真家の方が依頼されてうちの高校へ撮影に来たとして、同じような写真を撮ろうとしても、こういう無警戒な彼女たちの姿を写真に収めるのは難しいはず。絶対にどこか構えてしまいます

からね。そう考えると、これは間違いなくあのころの私にしか撮れない作品です。この作品のそういうところが私は気に入っています。かけがえない思い出が写っているから、自分自身にとっても本当に貴重なものです。

—校内で撮ったたくさんの写真をまとめるにあたって、方針や気をつけた点はありましたか？

うちは共学校で、男女問わず撮影をしていたのですが、作品としてまとめる段階で、女の子が写っている写真ばかりになっていきました。要素を絞って、すっきりした構成にしたかったからだと思います。とはいえ写真を選んでいくにあたっては、できるだけいろんな光景や場面を入れていこうとも考えました。写っている一人ひとりの個性とか関係性も、なんとか表せたいと思っていました。写真として見栄えが

いいか悪いかということは、あまり気にしませんでした。それよりも、もっと主観的な部分を大切にしながらセレクトをしましたね。写真を選んだり、並べる順番を決める作業をしていたときには、不思議な気持ちになりました。目には見えなくても、正解がどこかにあるものだという気がしたんです。夏目漱石の『夢十夜』に、彫り師の運慶の話が出てきます。彫刻をするとき、木材を削っていくのではなく、もともと眉や鼻の形が木の中に埋まっているのを掘り出すだけなのだという。それに似た感覚があったというか、私はただ正解を見つけていくだけでいいんだという感覚になれました。

—今回の作品でカメラを向けたのは、ごく身近な世界ですね。自分の周囲を追いかけることが、はたして「作品」たり得るのだろうかという不安は

なかったですか？

それはなかったです。まず、私が撮っている子供たちはみんなかわいい。それに、高校ってとても特別な感じがするものじゃないですか。遅刻したりしても許されないということはないし、いろいろな意味でやっぱり外界からは囲われ、守られている特殊な状況ですよ。その中で存分に騒いで、好きなようにふるまっている女子高生たちの姿は、きっと面白いにちがいないと思っていました。それが高く評価されるのかどうかは私には分かりませんでしたけれど、少なくとも自分にとって、撮るに値するものであったのは確かです。

一人ひとりが小さな宇宙みたい

—「beyond the universe」というタイトルには、どんな意味が込められていますか？



高校というのは社会から分離されて、学生たちが元気にはしゃいでいる特殊なところ。ここだけでひとつの別世界だと感じていました。自分がいた高校が、まるで宇宙を超えたところにあるような存在だという意味を、タイトルには込めました。それに、ここに写っている一人ひとりが、小さな宇宙みたいなものだという思いもありました。みんな内側に小さな宇宙を抱えているように見えるんです。友だちといるときはもちろん楽しい。でも、いくらいっしょに笑いあっても、自分という枠を超えることはどうしてもできなくて、どこかさびしい。そんな気持ちもして。そういう状態を表すにも、いい言葉かなと考えてタイトルにしました。

——写真を始めたのはいつからですか？

高校2年生のときです。祖父が新しくデジタ

ルカメラを買って、それまで使っていたフィルムカメラを私にお下がりしてくれました。そのカメラを、学校にいつも持っていくようになって、写真を撮ることが日常になっていきました。作品としてまとめた経験はこれが初めてです。どうしたらポートフォリオとして一冊にまとめればいいのかは、いろんな写真集を見て勉強しました。以前から写真集は好きだったんですが、作品づくりを意識してからは特に集中して見るようにしました。学校の図書館にたくさん写真集があったので助かったし、それでも足りなくて国会図書館まで足を運んだことも。蛭川実花さんやホンマタカシさんの写真集を見て、どういうつくりになっているのか、自分なりに考えていきました。

——高校を卒業した現在は、違うテーマに向かっ

ているのでしょうか？

これまで見向きもなかった景色を撮ったりと、いろんなものにカメラを向けて探っている段階ですね。映像を学ぶ学校に入ったので、そちらの勉強も進めています。ただ、いちばん力を入れなければいけないのは、自分の中身をもっと充実させることだと感じています。何を撮ってもその人の作品になるというような強い個性を、私がいきなり持てるようになるとは思えない。だからまずは、自分が本当に好きなものは何か、夢中になれるのはどういうものか、ちゃんと見極めて、確立したいんです。写真や映像を撮ることを取り扱ったときに、自分の中に何も残らないような状態じゃいけない。それではどんな作品を作っても面白いものにはならないんじゃないかと思います。まずは自分の中身を豊かにすることにしっかりと時間を使いたいです。

受賞者コメント

わかってもらえないような事は多いし、知ったように言わないでほしいと思う事もある。だから近寄らないでよ。そうやっていつだって寂しい。この件に関しては誰にでも当てはまると思うけど、そうじゃない、そうじゃないよ強く思っていた。長いことそんな風で、そういう想いや感情を外に吐き出す術もなく何かを見て聴いて感じて、それは無駄、もしくは「無駄」という意識すらなくて、「だから何だよ」という言葉に似た感情がふっと湧いては消えるような日々を送っていました。写真を始めた事によって、その日々を知りました。高校という場所や時間はやっぱり異質で、もっと色々考えてたことはあったけど、もう忘れてしまっ、残ったのは感情の残像だけ。単に忘れたのか、意図的に忘れたのかはわからない。今はその残像さえ霞みゆくけれど、それだけは作品に残っているように思います。

選: 蛭川 実花

写真ってそのときにしかない空気感とか過ぎ去ってってしまうものを写すものだと思うんですけど、それが写り込んでいると思います。女の子の中のいる人じゃないと写せない、幸せな感じや、イケイケな感じや、ちょっとした不安みたいなことが写っている。見せ方や本の作りは雑なんだけど、それを飛び越える妙な勢いがある、存在感がありましたね。自分が出てきた90年代の空気感みたいなものも少し感じます。それがまた何かの勢いになったら、彼女がこの後も撮り続けたら、きっと面白いことになるんじゃないかな、という期待感があります。

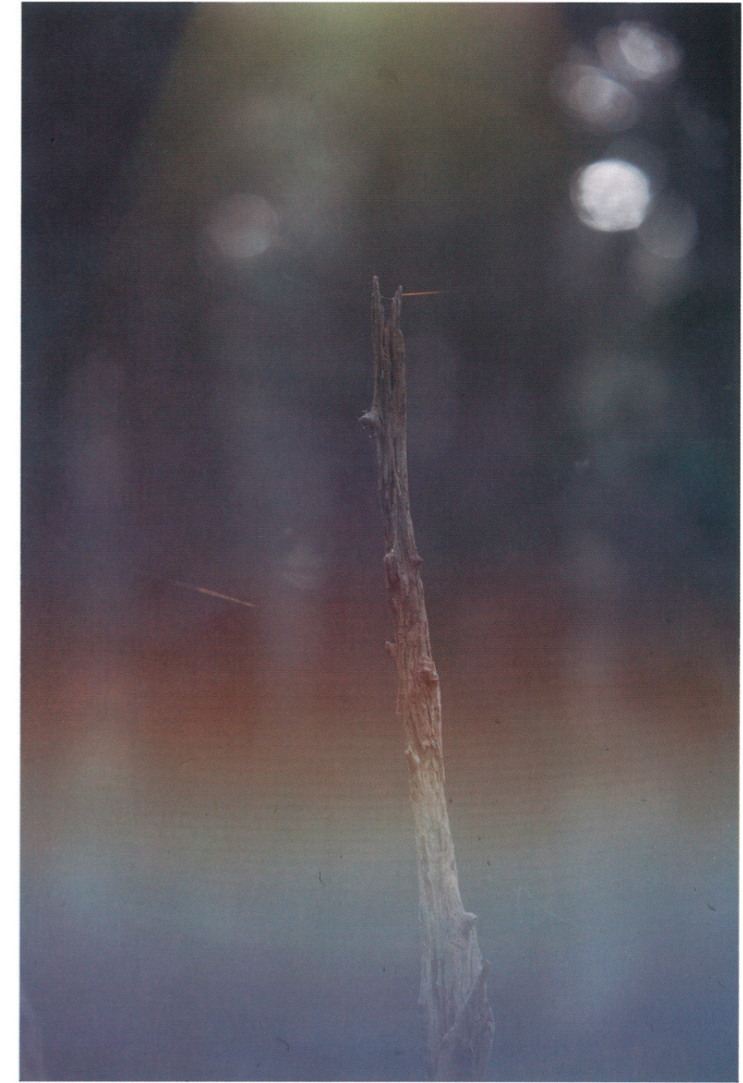


柴田 寿美 しばた すみ
「beyond the universe」
 ブック/A4/64ページ/インクジェットプリント
プロフィール
 1991年9月4日 神奈川県生まれ
 2010年 東放映画専門学校
 プロモーション映像科入学 在学中
 ショートショートフィルムフェスティバル
 & アジア 入選

2010年度(第33回公募)
優秀賞 榎木 野衣 選

高木 考一 「Fluid Film」





2010年度(第33回公募)優秀賞

高木 考一 インタビュー

炎、光、人物のシルエット……。断片的な要素を撮った写真が有機的に結びつき、全体でまとまったひとつのイメージをつくり出す。工夫を凝らしたインスタレーションによって、その写真群はさらなる魅力を湛えることとなった。

写真は「流れていくもの」

— 受賞作品はどんな意図の下に作られたのでしょうか？

何を撮ったのだということをはっきり示せるわけではなく、しかも、こういうテーマのもとに集められた写真ですということすら、なかなか言いづらいものになっています。作品をつくるときには、写っているもののイメージ、そこから湧き上がる言葉、物体としての写真という要素のどれもが、うまくリンクする感じになることが理想だと考えています。何が写っているのかという被写体の強さばかりが突出して注目されたりとか、そこから紡ぎ出される物語ばかりが先行するだとか、またはコンセプトだけ目立ってしまうといったことにはならないようにしたい。

それよりも、もっと全体を融合させて作品にしていきたいと思っています。今回の作品ではそういうことを狙って作ったのですが、どれくらい実現できたかどうか。見てくださる人の反応が楽しみでもあり、気になるところです。

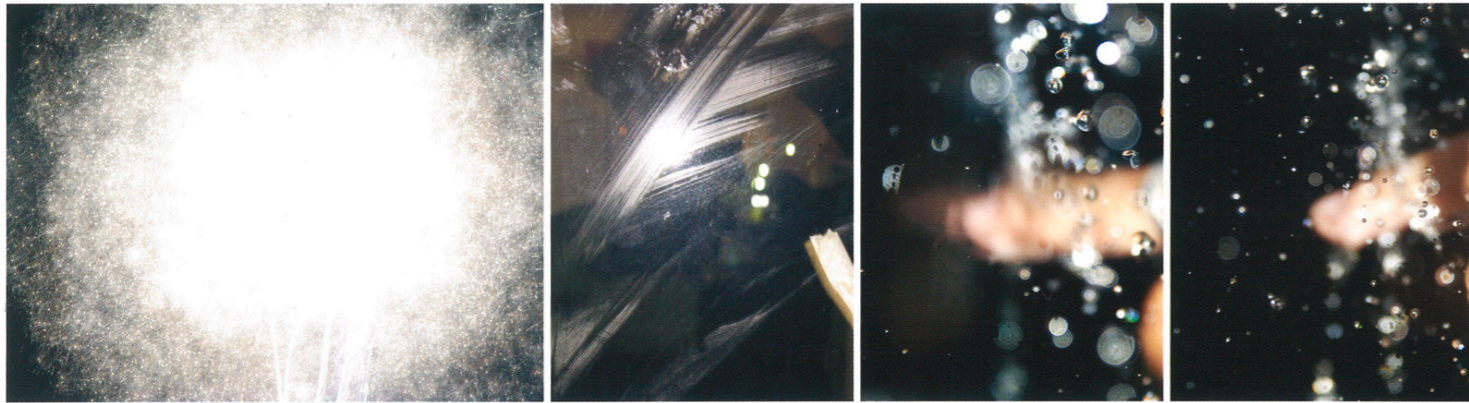
— 展示の方法が、とても変化に富んだものでした。作品を床に置いて壁に立てかけたり、写真に厚みを持たせたり、一枚のプリントのまま貼りつけたり。平面というより空間全体を演出しようとしたのですか？

そうですね。横6メートルという展示空間をできるだけ大きく使って、空間全体で何かを表せるように考えました。こういう展示にしたというイメージは頭の中かなりありました。それをなんとか形にしていくという作業でした

ね。写真はかなりの枚数を使うことになりました。ぼくにとって写真というのは、「決定的瞬間」とか、「アウラ」という言葉で語られるような、瞬間的に固定されたものではありません。どちらかという、「流れていくもの」というイメージがあります。一枚で完結するものではないという思いもあるので、展示には多くの枚数が必要になりました。流れていくものとしてのイメージが、うまく出せているといいんですが。写真は固定されたものではないと言いましたが、同時に一枚ずつの写真は、それ自体で成立していなければいけないとも思っています。単体でもちゃんと見応えがないといけません。全体でも、また一枚だけ見ても楽しめるものにする。それがぼくの作品の目指しているところです。

— 炎を写した写真などが目に留まります。これらは何らかの心情を表したようなものではないのですか？

何かを象徴させているということではないですね。火とか光、そういうものに強く惹かれる自分の気持ちはたしかなので、それをそのまま提示できたらと思っています。火や光といったものは、世界を構築している根源的な要素ですから、言葉でいろいろな説明や解釈ができるのだと思います。さまざまな意味合いは、これまでの歴史ですでに大量に語られてきましたよね。そういう考えを知るのとはとても面白いのですが、それでも火や光について、言葉だけですべてを語り尽くすことは不可能なんじゃないかとも思います。語られてきたことよりも、ずっと深いものを火や光は宿しているはずじゃ



ないでしょうか。これは火や光にかざらないことです。言葉で指し示したりするよりも、もっと豊かなものを世界は含んでいるはずだし、視覚だけで成り立つ世界というのがあるはずじゃないかと感じています。そのあたりを、写真で表現できたら面白いと思っています。ただ、作品を見てくださる人には、もちろんいろんな想像をしてもらったり、感想を持ってもらえたらうれしいです。「ああ、火だな」とか、「燃えたぎっているね」、または「なにか情熱的なものを感じる」でもいい。自由に捉えていただけたらいいのですけど。

世界がしぼんでしまわないように

——表現の手段として写真を選び取ったのはなぜでしょうか？

写真はその場に行かなければ撮れないし、被写体と何らかの形でコミュニケーションを取

らないといけないものですよね。引きこもっているわけにはいかない、それでは作品がつかれない。そんなところがまずは面白いと思っています。それに、写真は画面の中に、どうしても雑多なものが写りこんできてしまいますよね。現実を撮っているのだから、当然のことなんですけどね。「これだけを写したい」と思っても、背景や周囲に違うものが入ってしまう。でも、それが意外にイヤじゃなかったりします。世界はそもそも複雑にできているのだから、写真だとその複雑で割り切れない感じが、そのままよく表せるのだと思います。あまり画面を整理しすぎたり、解釈しすぎて要素を少なくしてしまうと、世界がしぼんでいってしまうような感覚があります。だから、写真にはできるだけ偶然の要素を取り入れようと考えています。僕がコントロールできるところに収まっているは、写真が面白くならないと思うんです。

——写真はいつから、なぜ始めたのでしょうか？

始めたのは19歳のときでしたね。高校時代は友人と映像作品をつくったりしていたので、映像の学校に進学しようとしたのですが、受験がうまくいかなくて。その後に米国へ旅行に行き、パチパチと写真を撮っていたら、そのときはポートレートでしたけれど、なかなかいいものが撮れた。これはいける、と思って進路を写真に変えました。写真でやろうとしていることは、そのころからほとんど変わっていませんね。日常の全体を見渡しながら、世界を捉えなおしてみる。そんなことを考えながら作品をつくってきました。そうした自分のコンセプトに基づいた制作を、今後もまだまだ続けていくことになると思います。

受賞者コメント

世界や僕の生活は、始まって13700000000年、僕の生活で30年、ととらず終わる事なく流れています。その流れは、ネガティブやポジティブの判別が利かない、要約も名前をつける事もできない動きそのものとしてある。というのが僕の世界観で、それを捉え、見、感覚化する為には？といった考え・欲望が僕の作品作りを支える動機です。

私・詩・史・死・嗜・思・・・・

言葉・物語る力(要約・名付け)を依り代にしつつ、見る事(視)のみで固定されない流れの世界や日々を捉える。

「シの量子化」「シ写真化」「シ者」・・・

流れを捉える・感覚化する・作品化する・環境化する挑戦の為に、

見る・観る・診る・視る・看る・・・事、

写真化し続ける事。

シャシン化・家。

まずミルことから。

選: 榎木 野衣

一貫して光の魔術性を扱おうとしている作品です。写真という自然光や人工照明で語られることが多いわけですが、人工の光や太陽の光からプラズマ現象としての炎につなげていくところに迫力がある。火炎には形がなく、流動的で原始的なイメージがあります。そういう原初的な光源と人体や水、山や天体などを作品の中で連携させることで、我々が生きている環境を捉え直そう、あるいは新しい自然を見つけようという感覚を感じます。資本主義の世に生きている我々の生活の中にも、野蛮な火や流動する水が必ずあるわけです。その所在を写真を使って未知なる世界からえぐり出すような凄みを感じました。



高木 考一 たかぎ こういち

「Fluid Film」

ブック(自主製本)/A4/インクジェットプリント

プロフィール

1980年 大阪府岸和田市生まれ
2002年 パンタンデザイン研究所フォトグラフィ科卒業
2008年 株式会社イノメディアプロ入社・スタジオ勤務
2010年 現在フリー

2010年度(第33回公募)
優秀賞 大森克己 選
谷口 育美
「BEAT」





2010年度(第33回公募)優秀賞

谷口 育美 インタビュー

壁面いっぱいぎっしりと貼られた数十枚のモノクロ写真が、見る側の心に迫ってくる。新宿歌舞伎町に通って、内側深くに潜り込んで撮影した作品だからこそ、画面は生々しい活気に満ちている。

「中に入り込めた」写真

——受賞作品が生まれた経緯は？

街で人に声をかけて撮らせてもらう。そういうポートレート撮影を以前から続けてきました。あるとき、写真家・渡辺克巳さんの写真集『新宿』を見て「なんてカッコいいんだろう」と思い、新宿で人を撮ろうと決意しました。それで朝も夜も新宿へ出かけて行って、声をかけて撮ったんですが、どうもうまくいかない。記念写真っぽいか、外側の顔しか写らなかったんですね。きっと、もっと内側に入り込まないといけない。そこで伝手をたどって、キャバクラで働き始めました。そこで写真を撮ってやろうと思ったんです。店の女の子たちといっしょに仕事をして、空いた時間にはおしゃべりをして、すっかり仲良くなりました。いつもカメラを持つようにしていたら、私が写真を撮っていても当たり前という空気ができてきた。そこで撮っ

た写真が今回の作品です。ずいぶん「中に入り込めた」写真になりました。

——撮影期間はどれくらいかかりましたか？

半年間です。働き始めたら見るものすべてが新鮮で、半年のあいだは、目に入ったものをなんでも撮るという感じでした。多いときで36枚撮りフィルムを一日10本くらい使いましたね。お店はあまり忙しいほうじゃなかったから、たくさん撮る時間があったんです。店内でも控え室でも、店の女の子たちとちょっと街に出ていったときも、ほんとうにいつでも撮っていましたね。カメラはビッグミニです。もともと荒木経惟さんとヒロミックスさんが大好きだったので、同じものを使うようになったんです。小さいカメラだから、ハッと思ったらすぐに構えてシャッターを押せます。店で働いていることがとても楽しかったから、シャッターを押したくなる瞬間がたくさんありました。最初は仲間に入れてもらえない

んじゃないかという不安もありましたけど、みんなフレンドリーでうれしかった。もともと私は女の子らしいところが全然なくて、髪をきれいにセットした働く女性たちにすごく憧れがありました。それを自分もできるというだけでうれしかった。きれいな髪型やお化粧をして、同年代の女の子たちと、女子高のクラスメイトみたいに過ごせたのは、写真のことを省いたとしても、とてもいい経験でした。それくらい気心が知れたからこそ、彼女たちのごく自然な姿が撮れたともいえるんですけど。ただ、働き始めた最初の数ヶ月はよかったんですけど、時間が経つにつれてだんだん写真が撮れなくなってきてしまった。目が慣れてきたんでしょうかね、シャッターを押したいという瞬間が減ってきてしまった。あくまでも写真のために働いていたので、これではいけないと思い、半年でお店を辞めることにしたんです。

——複雑なジグソーパズルのような展示がユニークでしたね。

働いていた新宿歌舞伎町の地図をベースにして、その中に写真をはめ込んでいくようにしました。写真は膨大にあるし、ストーリー仕立てのように並べる順番が決まっているものではない。これをどういう形で見せるといばいいだろうと考えていたときに、写真で歌舞伎町そのものをつくってしまったらどうか、ふと思いついたんです。それですぐに区役所で地図をもらってきました。見るとおもしろい形だったので、これはいけると思いましたね。

作品づくりは内面を吐き出す作業

——写真はモノクロプリントばかりですね。何か意図やねらいがあるのでしょうか？

私にとってはモノクロのほうが、見せたいものをはっきり出せる気がするんです。カラーだと、色が私の思いを少しじゃましてしまいそうだった



たんですね。それにモノクロは、現像もプリントも自分でやれるところがいいですね。自宅に暗室をつくってやっています。そういう作業はとても好きです。現像液の匂いがすっかり部屋に染みついてしまっています。でも、そういうところもまたいいなと思っているんです。プリントを仕上げて作品として壁に掛けたら、現像液の匂いが残っているということは実際にはないんですけど、私はある種の写真を見るとそういう匂いを感じたりします。見る人は、写真にまわりつく匂いなんかも含めて受け取ってくれているんじゃないか。そういうことを信じたいとは思っているんです。

—他の作品でも、被写体は人物が多いのでしょうか？

これまではずっとそうでした。いつだって人

を撮りたいと思ってきました。なぜでしょうね。人は一人ひとりみんな顔が違うし、その他の部分も同じところなんてまったくないじゃないですか。それがおもしろいです。とくに歌舞伎町なんて、歩いている人すべてに惹かれてしまう。みんな撮りたくなりますよ。ただ、私はこっそりスナップショットを撮るということができないからたいへんなんです。必ず声をかけて、許可を取ってからでないと撮れない。その人のイメージを勝手にかすめ取るようなことは、なんだか怖くてできないんですよ。

—写真を始めたきっかけは何だったのでしょうか？

最初に写真を撮るやろうと思ったのは中学三年生のとき。学校で職業適性検査を受けたら、カメラマンに向いていますという結果が出た。それ

は楽しそうかもしれないと思って、以来、一貫して写真の道を目指すようになりました。われながらお調子者だと思いますね。高校を卒業してからは、写真の専門学校に入りました。そこで写真を使って作品をつくっていく作業を始めたんですが、自分の中のを吐き出すような感覚があって気持ちよくて、すぐ夢中になりました。それ以来、東京で作品をつくっています。いちど故郷の鹿児島へ帰ったこともあったんですが、やっぱり写真を続けたいと思って再度上京しました。今はもう、写真を撮るためなら何でもするという決意で取り組んでいます。やりたいテーマはすでに自分の中に浮かんでいます。人を撮るといふ基本の路線は、しばらく変わることがなさそうですね。

受賞者コメント

私はいつも彼女たちに憧れていました。女の子であることを楽しんでいるように私の目の前に魅力的に存在していました。その反面自分にはない女の子を持っている彼女たちに嫉妬する心もありました。そのものの本質、個人としての彼女たちを知らなければ自分の価値観で勝手に想像し決めつけた架空の第三者が存在してしまいます。それは決して本当の彼女たちの姿ではなく自分の中で創りあげたたったそれだけのものでしかないのです。私にとってみんなと共有した空気、場所それは、一つの学校であった出来事。青春でした。

選: 大森 克己

「写真だな」って思いました。今だな、生きているなって感じ。まるで音楽のよう。派手な髪とか、アクセサリとか、生々しい感じとか。でも表現としては上品で、カッコいいんだよね。撮っている人間がちゃんとその場所にいる感じがします。それに情報量が多くて、隅々まで見ていてあきない。プリントのサイズやタイトルもよくて、ばらばらと見たときに気持ちがいい。この人の次の写真が見たいですね。この作品はちゃんとやりきっている感じがするし、この人は多分ダラダラ同じことやらないでしょう。写真じゃなくてもいいかもしれないし、続けるんだったら別のものを撮るんじゃないかな。



谷口 育美
たにぐち いくみ
「BEAT」
プリント/全紙/
79枚/モノクロ印画紙

プロフィール
1988年 鹿児島県生まれ
2008年 東京総合写真専門学校
写真芸術第二学科卒業
2007年 「SYNAPSE」(Gallery LE DECO)
2008年 「東京総合写真専門学校第48回卒業展」
(富士フィルムフォトサロン・東京)
2008年 「東京総合写真専門学校卒業制作展」
(横浜市民ギャラリーあざみ野)
E-mail: olympia06-iku@tbz.t-com.ne.jp

佳作受賞作品 選: 大森 克己



稲口 俊太 いなぐちしゅんた

「sensui」

額装/454mm×605mm/
9点/セラチンシルバークラウド

作者コメント

「写真にひかれる」のは何故?
落ちていく感覚。吸い込まれる意識。
なんじゃこりゃ!私はそれを探しています。
そして、夜の海へと潜りました。

選評

プリントが丁寧だしきれいです。黒がすごくかっこいい。見ていると引き込まれていきます。ただちょっとまとまりすぎているじゃないですか。それに比べるとこれは「自分との対話」感があって、その息詰まる感じがいいんだけど息苦しいともいえる。だから次のシリーズは、もっと極端に内にこもるか、外に向かっていくものを見たい。だから佳作にしました。



菱田 雄介 ひしだ ゆうすけ

「portraits of Pyongyang, portraits of Seoul.」

ブック/四切/102ページ/タイプCプリント

作者コメント

軍事境界線を挟んで分断され、60年。隣り合う国の人々は、全く異なる文化の中でそれぞれの日常を生きている。人が生まれ、生きていくということ。

HP: <http://www.po-u.com>

E-mail: yusukehishida@mac.com

選評

単純に、撮りにくいものを撮っていることはエライと思う。オレも行ったことがあるけど、北朝鮮でこういうの撮るの、けっこう大変だよ。こういう写真がなくなっちゃうと困るし、つまらないとも思う。韓国の人と北朝鮮の人、似ているようにだけ顔が違うし、見てると面白い。「歴史の真実が浮かび上がる」とかは、言わなくてもいいんじゃないかなあ。



澄 毅 すみ たけし

「光」

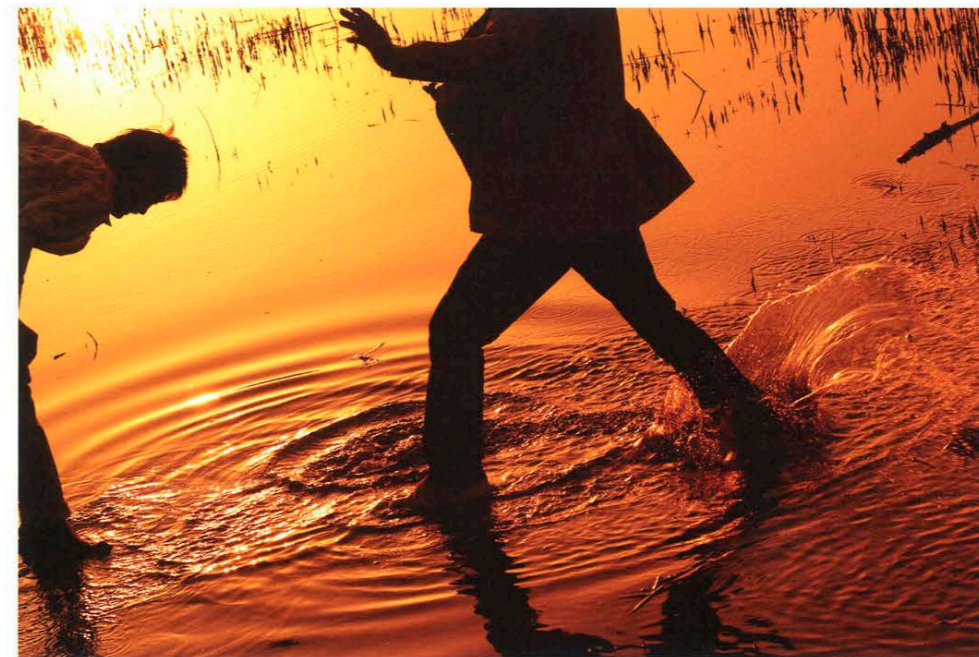
ブック/大四切/49ページ
パネル/A2/5点

作者コメント

過ぎ去っていったひとを残すのではなく、生身の人間の手を握るのと同じ感覚で、触れたいと思い制作した。

選評

写真を加工することにちゃんと意味があるよね。表現方法として何やってもいいわけだから、自分の写真と人の写真を並列させて交ぜてもいいわけだし。特に、おじいちゃんの古い(光をのせた)写真がいい。でも気になるのは、古い写真がよすぎて、おじいちゃんの写真の時間に勝てない感じがあるんだよね。これで今の写真がもっとよかったら、すごい作品になっていたと思います。



松井 一泰 まつい かずやす

「パラダイス☆INGA」

プリント/A3/70点

作者コメント

この度このような賞をいただき誠にありがとうございました。

選評

なんか面白いんだよね。デジタルのテクスチャの良さもあるし、すごいローカルな感じもいい。生き物が写っている作品がすごいね。この人の作品、ウェブサイトで見ただけで、そっちなかなかいいんだよ。



赤石 隆明 あかいし たかあき

「Level Flight」

ブック/四切/59ページ

作者コメント

作品撮影、使用を快諾して頂いた全ての作家に感謝します。

選評

この作品はちょっと暗いんだけど、懐かしい感じがしたんです。個人的なことなんだけど、国分寺や高円寺に住んでいる友達を思い出した。昔の仲間ってこういう感じのニオイがした。それから、この写真から感じるの、どの写真も部屋の中にいるような感じがしてくる。あまり外に出ないで、ずっと部屋の中で過ごしているような時期に撮った写真なんじゃないかな。



五月女 久美子 さおとめ くみこ

「ephemeral」

プリント/大四切/20点/ゼラチンシルバープリント

作者コメント

この度は佳作賞を頂きとても嬉しいです。私を支えてくれる人達に、特に家族に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

選評

窓の写真を撮ると、だいたい逆光になったり、斜光で入る光と影を見せるようなことになる。そういう写真の、影と触れ合うみたいところがこの作品にはあって、彼女は、全部自分が見た光と影ばかりをずっと撮っているような感じがする。それが、何か素直にこっこの目に飛び込んできたという感じがな。あまり表現しない。いいじゃん。写真って表現じゃないからさ。



木築 憲一 きづき けんいち

「Anthropophobia× Sociophobia」

プリント/A3ノビ/76点/半光沢紙

作者コメント

これからも、対人恐怖(Anthropophobia)と社会恐怖(Sociophobia)に溺れず、精進して創作し続ける所存です。
E-mail: moon@xd.egoism.jp

選評

この作品を最初に見たときに、彼が何を撮っているのかなと思った。外の風景を撮る、その外の風景との距離感がすごく一定で、何か拒絶しているような感じがした。そこが、なんていうのかな。ムードがあるなと思った。一定の拒絶感があるからどうしても踏み込まない距離があるっていうか。拒絶しながらも、写真全体を通してムードがあるところがけっこう好きですね。



佐藤 航嗣 さとう こうじ

「ぼくは、はだかの王子様」

ブック/大四切/50ページ/タイプCプリント、ゼラチンシルバープリント

作者コメント

この作品は、僕と松岡君とJoel君の一生忘れない思い出です。
HP: <http://www.kojisato.net>

選評

この作品は、モデルになっている西洋人の男の子が可愛かった。こういう可愛い男の子を撮ると、セットしたようになっちゃう感じがするんだけど、これはすごくうまくいっている。1枚がピタッと決まっていて、写っている彼が写真の中で浮いていない。そこがすごくいいな。あと、ちょっと色っぽいところもある。きっと彼は友達で、2人がすごくいい関係なんだろうな。

佳作受賞作品 選: 榎木 野衣



牛久保 賢二 うしくぼ けんじ

「Fake Book」

プリント/A3ノビ/15点

作者コメント

実写+匿名+アイコン=Fake book
HP: <http://www.fotologue.jp/usukubo>
E-mail: doob_k@yahoo.co.jp

選評

携帯電話にカメラが搭載されて以降、至るところで写真を撮るのが自然な行為になりました。が、やはり撮るのは顔が中心です。そのような状況の中、敢えて顔を隠すことで、一番肝心な部分が脱け落ちている。でも、見た目は変哲もないスナップ写真である。そのギャップがこの連作を不気味なものにしています。顔が消されているということに由来する「のっぺらぼう」的な怖さもあるし、撮られる者が鏡を使って光を反射するという自己言及性も感じさせます。



こまつ のりまさ

「▲≡▼」

プリント/330mm×670mm/25点/印画紙

作者コメント

夜のネオンを300mm望遠でフォーカスはずして撮影。だから“像”としては意味をなさないはず。けど、見る側の方でいろいろ解釈してしまう。

選評

歓楽街のネオンをピントを外して撮ったものですが、結果的に見えてくる光のつづれ織りが、欲望を吸収する歓楽街のスピード感のある現場のようでもあるし、他方で人間の生死を超えた彼岸的な感覚も呼び起こします。その両極の中間で写真の力を借り、光が運動しているような印象を受けますね。作品を見ると、身体が飲み込まれていくようで、視覚的な作品に見えて、情動に働きかけてくる作用も感じます。



菊池 飛鳥 きくち あすか

「ノンフィクション」

プリント/A3ノビ/60点/局紙

作者コメント

多くは語らず、少なくとも語らず。沈黙は守らず。

HP: <http://gero.asukakikuchi-photo.net/>
E-mail: lecume-des-jours@i.softbank.jp

選評

ヨーロッパで庭を見ると、人間の力で自然をどうコントロールするか、という理性や秩序を感じます。対して戦後日本の一般住宅の庭は、それとは異なる無秩序で雑然とした世界。しかし、住んでいる人の伺い知れぬ利便性が幾重にも折り畳まれた使い勝手のよいものかもしれません。日本の一般住宅の庭の、秩序と無秩序には取まり切れぬ世界の把握があぶり出されるような興味深い作品です。



西村 美和 にしむら みわ

「Instanceシリーズより Blue car」

プリント/1,450mm×1,150mm/5点

作者コメント

大きく小さな人間をより小さくする。より敏感になった身体で。そんな交換の隙間に生まれるものが見たい。受賞で次制作の元気を戴きました。

選評

日常の端で、実際には起きそうもない物語を、写真を使って撮ることで見ると現実であるかのように受け止める。その効果自体がうまく構成されている作品です。単に幻想というのではなく、現実の世界では特にドラマもなく日常が淡々と繰り返されている。この両者がうまく画面の中で共存しています。この共存を説得力あるものにするためにコントロールされた色彩も含めて、とても巧みです。

佳作受賞作品 選: 清水 穰



上山 まい うえやままい
「痒いところ」

ブック/六切/42ページ/デジタルプリント

作者コメント
10年後もブレイク寸前。

選評
構図の作り方が初々しくて分かりやすすぎるけど、この人は良い目をしている。彼女の写真は、被写体が意識していない部分を見る、意地悪なものです。そういう意味で被写体をちゃんと見ている。例えば、おしりが見えるファッションをするには、この人はちょっと太めとか。構図はありがたいけど、写真家としての目を持っている人ですね。

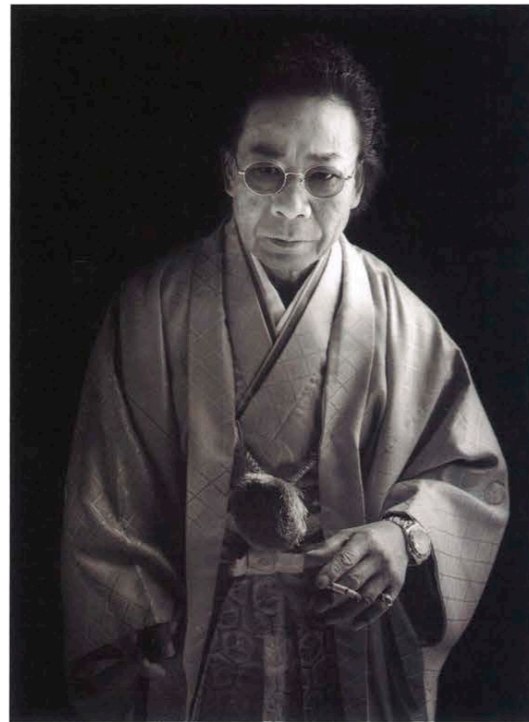


刑部 信人 おさかべのぶと
「holiday making」

プリント/大四切/60点/インクジェットプリント

作者コメント
写真は、いろんなところに僕を導いてくれます。次はどんな場所に連れて行ってくれるのか楽しみです。

選評
こういう集合写真は、解像度だけで言えば人間の目を凌駕したデジカメの可能性です。例えばここにいる人の名札を拡大すれば見られる。写真の中にいくらでも掘り出せる要素がある。だけど「ああ、こういう写真はあるよ」と言われたいための、「細部を見たい」欲望が足りない。半分で切っただけは空だけといった、構図はきれいだけど情報量がない写真は駄目。



内倉 真一郎 うちくらしんいちろう
「肖像」

プリント/1,110mm×1,520mm/5点/
インクジェットプリント

作者コメント
自然な表情を引き出すことが目的ではない。もくろみは、僕自身の世界に引きずり込むことである。貴方の個性に、僕の個性が色濃くかぶさる。

選評
これだけの大判で白黒の写真で、すごいストレート。なかなかできないことなので、度胸がいいなど。でも、よく見るとそんなにストレートじゃない。この男の人もヤクザっぽいけど、そういう格好をさせている。嫌味にならない程度の演出写真。嘘をついているが、悪びれない。モデルをきちっと選んでいて、セクシーですね。

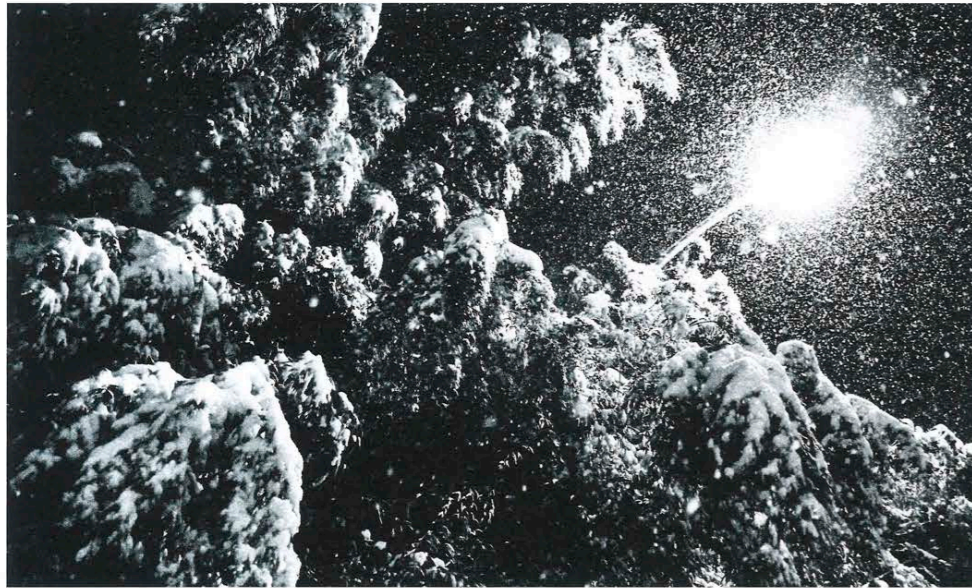


関本 幸治 せきもと こうじ
「スマイルネックレス」

額装/直径450mm 8点/直径600mm 8点/
直径705mm 6点/直径900mm 1点/
素材:ラムダプリント、ウールペーパー

作者コメント
「いつも笑顔を見せない少女が 他の沢山の笑顔に囲まれて 少し微笑み 真珠の珠のように輝きだす」そんな情景を浮かべながら制作しました。

選評
今となっては古めかしく見える少女趣味を真面目にやっている。2010年に80年代トレンドドラマをやれば、むしろ新鮮という感じで選びました。エグくもあり滑稽でもあり懐かしもある。基本的に、女の人が「自然に」振舞うポーズとか姿勢(化粧品会社のCMI)を巧くシミュレートしている。広告の中のナチュラルですね。ただし、意図的なんだろうけど、霧の演出はよくない。



草薙 裕 くさなぎ ゆう

「SNOW」

ブック/四切/36ページ/インクジェットプリント

作者コメント

果てしなく降り積もり、刻々とその姿を変えていく。静まり返った雪の夜に宇宙を感じた。

選評

私自身撮ってみたことがないからでしょうか、「すごい」「きれい!」「こんなふうになるんだ」という素直な驚きを感じました。理屈じゃなく、シンプルでいいなと思って。これで何を語りかけてくるのだ、というようなことよりも、写真が心に直接刺さってくる。そこが好きですね。余計なことをぐずぐず言っていないのもいい。単純に美しい。力強い。わーっ!て心が躍ります。



gsex

「もう、家には帰らない」

パネル/1,940mm×1,120mm 2点/530mm×530mm 8点/素材:テトロンボンジ

作者コメント

こゆ時、どゆ風に感情を表せばいいのかわからない時、自分にメイクして衣装を着てシャッターを押して走るのです!<想>

選評

こういうことを外側から撮る人はいっぱいいるけど、内側から撮る人はいない。面白い写真だと思います。でも、布にプリントしたり色をいじったりしたことで、かえって見えにくくなっている部分がある感じがします。この人自身も多分変わった人で、面白い世界にいて、写真も面白い。ストレートに撮って発表したら、もっと強く見える写真になったと思います。



小澄 源太 こすみ げんた

「超日常」

ブック/A3/81ページ/インクジェットプリント

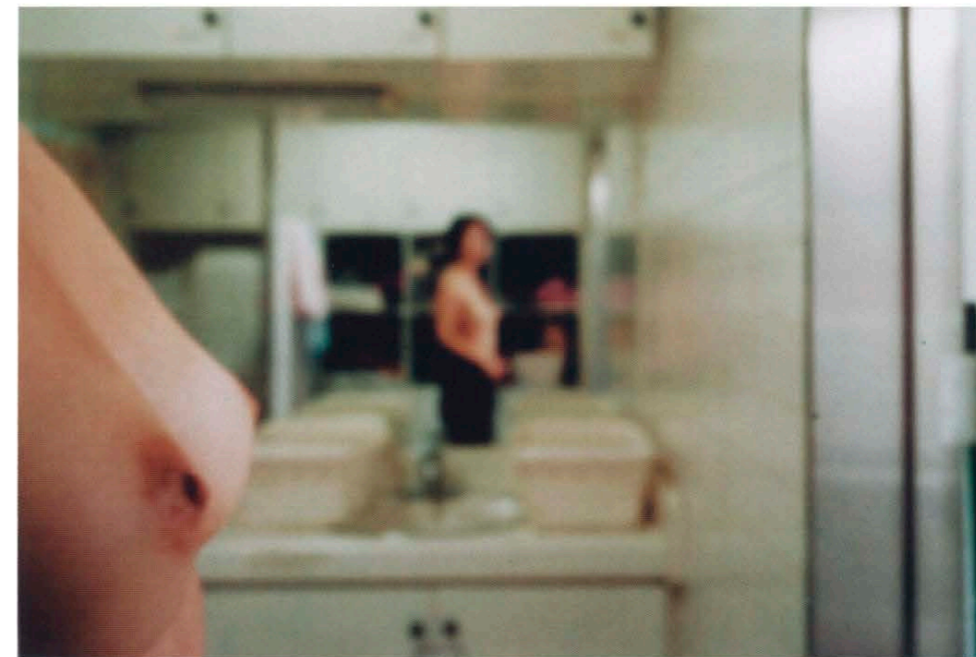
作者コメント

どの家庭でもありそうなプライベートフォトやと思います。凄く普通で、少し変な日常、その隙間が僕の安全地帯です。

HP: <http://cosmoheadanno.net>

選評

奇妙な視点、奇妙なざわざわ感があります。気持ち悪くもないんですけど、気持ちよくもないという感じで、疾走感もある。悲観的でもなく、楽しいばかりでもなく、闇もあるような感じがするし、でもなんだか日常ってこんなものだよって思わされる場所もある。本人が「こうやったら変だろう」とねらっている感じがしないのがいい。この人自身が滲み出ているんじゃないかと思えます。



夏野 葉月 なつのはづき

「change of life」

ブック/A4/40ページ/2冊

作者コメント

生と死の狭間の「変化」がこの作品のテーマです。いま、死を想う誰かになにかを伝えることが出来たら嬉しく思います。

HP: <http://www.natunohazuki.com>

E-mail: i@natunohazuki.com

選評

こんなに文字ばかり写っていて写真としてはどうなのかと疑問は感じつつも、でもやっぱり心を打たれました。作画的じゃない気がしたんですよ。ちょっとしたところばっかりかのような文字が羅列されているんですけど、彼女の生活とか、痛々しさとか、でも前に進もうという思い(思ってるのかわからないですけど)や、彼女の感じていることが写っていますごく魅力的です。自然に私の心が動いたので、素直に選びました。

高木 こずえ 「SUZU」



2006年度(第29回公募)グランプリ

高木 こずえ インタビュー

グランプリ受賞後、テーマや手法を自在に変えながら発表を続けてきた。最新作は故郷で撮影。自身の原点を見つめ直す、深みある作品となった。

ふと諏訪を撮ろうかと思いついた

—故郷の長野県諏訪市で撮影した写真が、今回の新作になっているのですね。

はい、生まれてから6歳まで暮らしたのが諏訪エリアです。ただし諏訪を撮ったのは、ノスタルジーを感じてとか、東京で制作するのは疲れたからとか、そういう特別な意味やきっかけがあったわけではないんですけどね。あるとき、ふと諏訪を撮ろうかと思いついただけで、じゃあ何を撮ろうかと考えて、事前に決めていたのは自分が6歳まで住んでいた家と、通っていた保育園は見てこようということだけ。あとはとにかく行けばなんとかなるという気持ちでした。そうしたらちょうど「御柱」も開かれました。諏訪で7年に1度しかおこなわれないお祭りなのに、びったり時期が重なりました。ラッキーですね。御柱の様子は、ばっちり撮影しましたよ。

—制作に要した期間は?

撮影は100日間きっかり。というのも、しばらく諏訪を撮るとなったら、まずは住む場所が必要です。実家はすでに長野市に引っ越しているの、ウィークリーマンションを探しました。長期滞在プランというのがあって、その最長のもが100日間だったんです。滞在期間としてはびったりでした。3ヵ月というよりも100日といったほうが、「ああ、あと何日しかない」という感じでカウントダウンしやすいのでよかったです。

—その100日間で、撮影は順調に進んだのでしょうか?

来る日も来る日も出歩いて、写真を撮っていました。小さいころに住んでいた住宅でも、保育園でも撮影ができました。住宅にはまったく知らない人が暮らしていましたが、声をかけてごあいさつして、家の外も内も撮らせていただきました。実際にそこに立ってみると、ほとんど何も覚えていないものですね。保育園のほうは、あいさつに行くと、園長先生がわたしのことを覚えてくれたんです。それで事情を説明して、撮影させてもらえることに。こちらも記憶があいまいで、建物のなかに入ってもなかなか思い出せることは少なかった。すごく巨大な階段があったのを覚えているんですが、いま見たらごくふつうの階段でしたね。あのころは自分がいかに小さかったのかよくわかります。

—撮影は2010年のうちに終了していましたね。そのあとは写真をセレクトしたり、ときに加工したりする制作の時間。これには時間がかかるものなのでしょうか?

撮影するのと、そのあとの制作にはだいたい同じ比重を置いています。でも実際には、制作に費やす時間のほうが長くなってしまいますね。撮影していた100日間はほとんど毎日、外に出て歩いていたのに、制作の時期になると家にこもりっきりになります。生活は正反対になってしまいます。まあでも、どちらの生活も平気で、気にはなりません。それよりも、自分のやろうとしていることが徐々に形をとってくると、それがおもしろくてしかたがない。好きなことを夢中になってやっているという感じなので、がまんして引きこもっているということはないですね。

—写真新世紀でグランプリを獲得したのが2006年。その後、個展や写真集の刊行、木村伊兵衛写真賞の受賞など休む間もなくキャリアを積み重ねています。グランプリの記憶はすでに遠い過去のことですか?

振り返ると、プレゼンテーションをしたりするのはたいへんでした。大学の先生に相手をしてもらって、練習したことを思い出します。よく乗り切れたものです。ここで賞をいただいたことによって、いろんな物事が動き出しました。1年後に個展の場をいただいて、その後に画廊に入ったり写真集を出したりして、それが木村伊兵衛写真賞にもつながっていく。いま考えてもほんとうによかったなと思います。

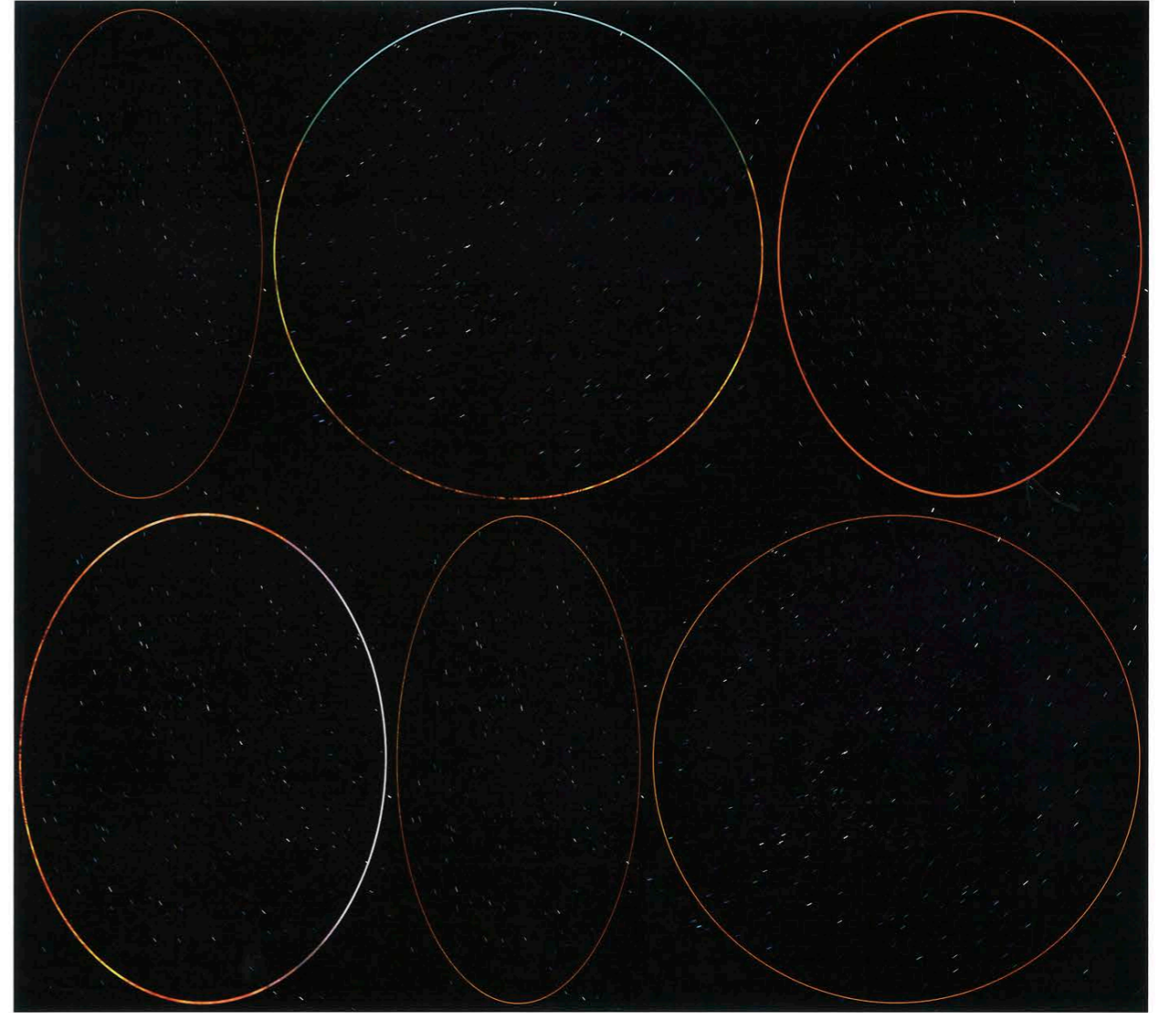
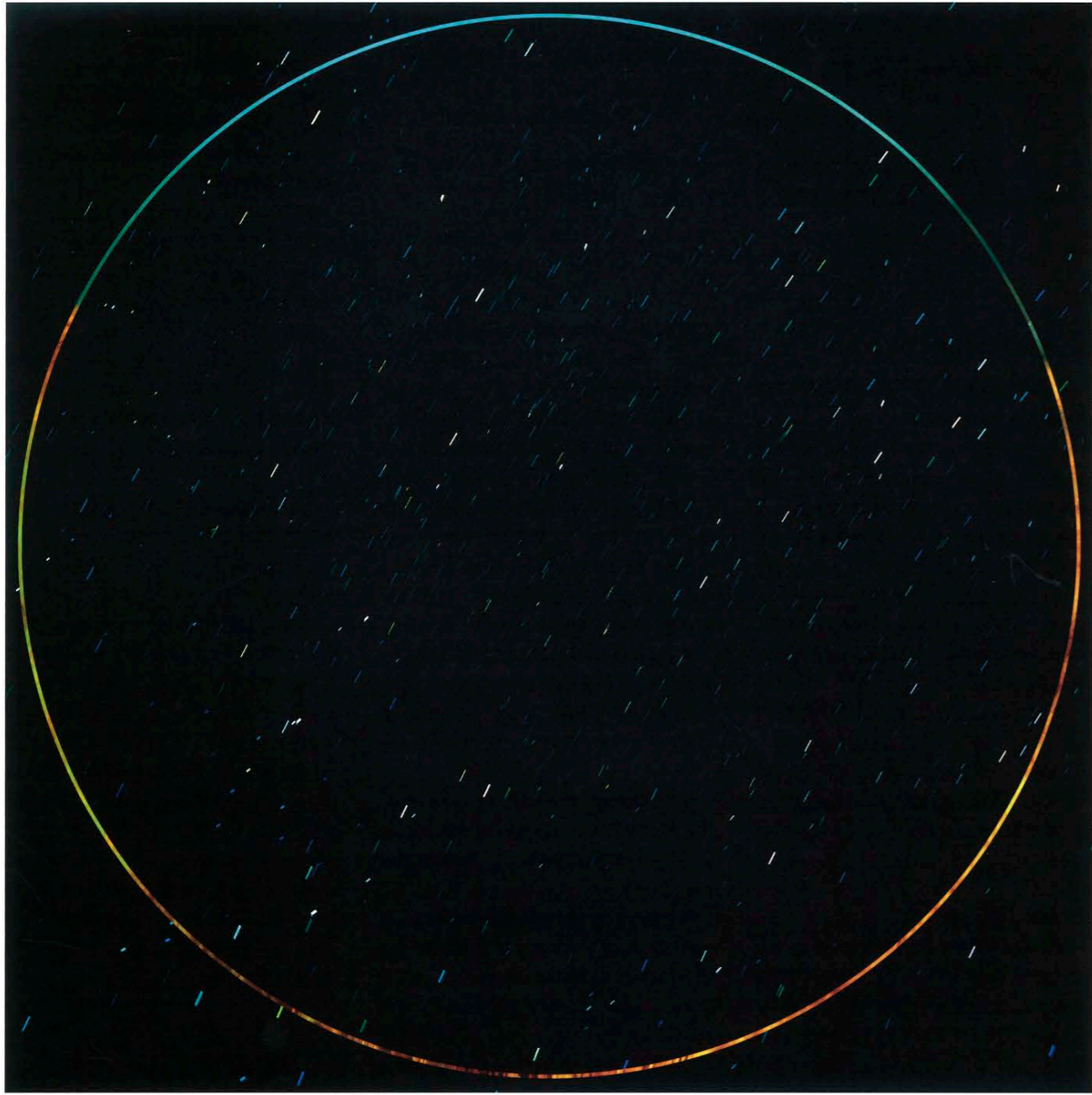
—ひとつの活動を次へ、次へと繋げていく上で、大切にしていることはありますか?

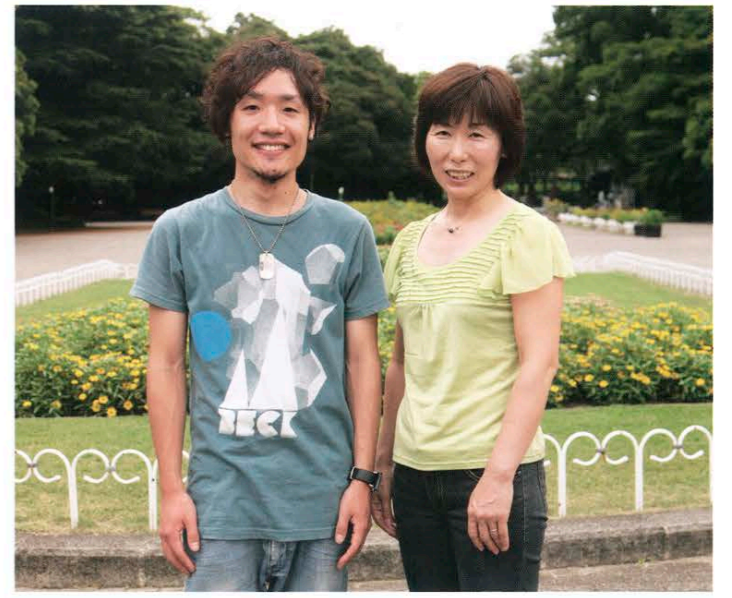
どうなのでしょう、実感としてはラッキーがたくさんあったということしか思い浮かびませんけど。ただ、やっぱりすべては作品があってこそ話ですから、次の作品、その次の作品をひとつずつやっていくことしかないだろうとは思っています。あとは、写真を続けるためにどうしたらいいかを、いつも考えてはいますね。写真をやっていくために画廊に入ったりもするし、写真集を出したりもする。これが逆の順番になるとよくないと思っています。写真集を出すために写真をやっているわけではないし、ギャラリーで作品が売れるようになるために写真をやっているのでもない。この順番を取り違えないようにしなければいけない、それだけは気をつけていますね。

高木 こずえ 「SUZU」

プロフィール

1985年長野県生まれ。2007年東京工芸大学写真学科卒業。作品集に「GROUND」「MID」(ともに2009年、赤々舎)。2006年キヤノン写真新世紀グランプリ、エプソン・カラーイメージングコンテスト準グランプリ受賞。2009年VOCA展府中市美術館賞受賞。2010年第35回木村伊兵衛写真賞、第15回信毎選賞受賞。国内外の個展・グループ展多数参加。2011年ネクスト:信州新世代のアーティスト展2010(長野県伊那文化会館、ホクト文化ホール)に参加。





2009年度(第32回公募)グランプリ
クロダ ミサト
「家族の風景」

2009年度(第32回公募)グランプリ

クロダミサト インタビュー

自分の彼氏を被写体にした、情にあふれる作品でグランプリを受賞。
1年後の展示では作風をがらりと転換。テーマに据えたのは「家族」だった。

「家族とは何か」と問いかけたい

——「あなたはこの写真を見てどれが本当の家族だと思えますか?」。展示会場には、そんな不思議な言葉が掲げられていますね。

作品は、若い男性がそれぞれ違う誰かと、笑顔で並んでいる写真11点で構成されます。タイトルは「家族の風景」だから、一緒に写っている人たちと男性は家族なのかな?と、まずは思えますよね。それなのに、「どれが本当の家族だと思えますか?」と問われてしまうと、え、どれも家族じゃないのか、でもちゃんと家族のツーショットも混ざっているのかな、と戸惑ってしまう。どれが家族でどれが違うのか、わざとすぐにはわからないようにしてあるんです。だから、どれが本当の家族なのか、じっくり写真を見て探してくれたらいいと思う。それに加えて、本当はもっと先のことで届けられたらいいと考えているんですね。家族についてどう考えていますか、あなたにとって家族とはなんですかということを、ぜひ問いかけたいと思っていますよ。

——実際には、どのようにして撮られたものなのですか?

全ての写真に写っているのは、私が交際していた相手です。彼の両親は離婚していて、すでにそれぞれが新しいパートナーと再婚しています。だから彼には、血の繋がっていない兄弟や、半分だけ血の繋がっている兄弟がたくさんいます。会ったこともなかったそんな兄弟たちや、私の家族と、彼を並べて撮っていったのがこの作品です。

家族を考える枠組みって同じ環境の中でもそれぞれが違う感情を持っているのかもしれないですね。絶対的なものではないんじゃないかということに気づかされたんです。

——そう考えると、家族をどう定義するかは、人によって異なってきますね。

人によって本当にバラバラだと思いますよ。血の繋がりを重視して家族の枠組みを考える人もいるだろうし、とにかく一緒に環境を過ごしているかどうかで家族かそうじゃないかを分ける人もいます。ペットなど人間ではないものを家族とする人もいれば、いくつも家族があるという人だっているでしょう。この作品がもう一度、自分にとっての家族を考えるきっかけになればと思います。キャプションなどで「このふたりの関係はこう、こっちはこう」と説明することもできたでしょうけど、それだと「彼はこんな境遇なんですよ、おもしろいでしょ」ということになってしまう気がして。私が一番言いたいのはそういうことじゃないので。

——クロダさん自身の家族も交えて撮影しているのはなぜでしょうか?

以前から、自分がセックスした相手のシリーズを撮っていたので、これまで彼のことは長く撮ってきたし、家族ぐるみの付き合いがありました。たまたま彼とうちの兄がとても似ていて、二人並んだ写真を人に見せると、たいい彼の家族だと勘違いされました。なるほど写真にはそういう面白さもある。ひとつの事実を写してい

るのに、見る人によっていくつもの事実が生まれてくる。それにもし私と彼が結婚したら、そこもまた家族になりますよね。こういうのをいれると、ますます家族って不思議でわからなくなるなんて思って、私の家族も組み入れていくことにしました。

——この作品を作り始めた最初のきっかけは?

ずっと、性をテーマにして作品づくりをしてきて、その繋がりで家族のことも考えるようになりました。そんな中で彼と出会ったら、自分の中の家族の概念がはっきりと崩れた。私はこれまで、家族は環境が一番大事なんだろうと感じていました。家族は生まれてはじめて接する相手であって、自分のアイデンティティが確立する場所になっている。だから、一緒に暮らしているのが家族なんだろうと思っていました。でも彼を見ていたら、どうもそう固定して考えてばかりもいられないと思うようになった。それに、血の繋がりのすごさも見せつけられたんです。彼は小さいころに両親が離婚したあと、母親と暮らしていたんですね。父親の記憶はないのですが、大人になってから再会しました。彼と父親が2回目か3回目に会うというとき、私も付いていったんです。3人でご飯を食べていたら、彼と彼の父親がとても似ていることに気づいた。声や雰囲気、口癖なんかも一緒に。血の濃かってこんなに強いのかと思いましたよ。DNAってなんて怖いのかと。それを目の当たりにしたら、家族って何かわからなくなってきました。家族は環境だけじゃないということ、私は目撃してしまったのだ

から。そういう驚きを含む作品を作って、見る人たちに家族を再認識してもらったら面白いかなと考えるようになりました。

——一枚ずつの写真は、まるで記念写真のように真正面から二人の人物を捉えています。このオーソドックスな撮り方は意図的なのでしょうか?

写真だけを見たら、これは何だろう、誰でも撮れそうな写真だと思われるかもしれませんが。受賞作なんかとはずいぶん違うんじゃないかと。これは意図してそういうビジュアルにしています。ちょっと表に出てパチリと撮った、単なる家族写真という風にしたかったんです。私個人のイメージをつけたくはなかった。見る人ができるだけ何の制約や思い込みも持たないような写真にして、自由に考えを膨らませて欲しかったんですね。

人の感情や欲望に興味がある

——自分にとっての家族へのイメージも変化しましたか?

作品を作っていくうちに、ずいぶん変わりましたね。家族の定義は人それぞれだということ、を、ますます強く感じるようになりました。思えば家族だけじゃなくて、全てのモノゴトについて、考え方は人それぞれなんですよ。改めてそう気づくようになりました。

——他の作品もそうですが、気づけばいつも人物を撮っていますね。

もともと人が好きで興味があるから、撮りたいと思うものもやっぱり人ですね。ポートレート



写真新世紀東京展2010 クロダミサト氏 個展会場

とにかくこだわっているわけではないけれど、作品を作る上では人を外すことは考えられない。特に、人が持つ感情とか欲望に興味があるんですね。「情」って、世界で一番強くて怖いものだと思いますか。たとえば私は、幽霊より、ジェットコースターよりも、断然ストーカーのほうが怖い。欲望や嫉妬心のような「情」が怖いということなんですけど。そういうものって、目に見えないものだけど、写真にはきっと写るはずだと思っているんですよ。そこを撮る写真が一番面白い興味がある。

人間の感情を見ていくと、誰でも多分おかしくて、恥ずかしいところがあると思います。それをどれだけ表に出してしまうかどうかの違いがあるだけで、みんなおかしかったりするんじゃないか。すごい美人のお姉さんが、実は24時間ずっと彼氏のことばかり考えていたりとかするんですよ。そういう「情」こそ、私が写真にしたいもの。写真新世紀でグランプリをとったときの作品は、彼氏のことを「好きだっ」という私の感情をストレートに強く出したら、それが認めてもらえた。その経験でいっそう、人間の感情は写ると確信しましたね。どんな状況で撮っても、相手のことを強く考えていれば必ず情が写りますね。持ち物なんかを撮っても情が写ると思っています。情はなぜ写るか、ですか。それはわからないですけどね。念写みたいなのなんですか。

——グランプリ受賞後、自分の中でどんな変化がありましたか?

自分自身はあまり変わっていないかなと思

ます。ただ、まわりの目を意識して発表の仕方を変えるようにはなりました。作品を発表することに責任を持たなければいけないと思うようになったということですね。たとえば今回の展示作品でも、私の彼を始めとして、多くの人が顔をさらすことになります。それによって人を傷つけたりはしないようにと、細心の注意を払います。基本的には、被写体をきちんと愛していれば問題は無いはずで、そうした愛があるのだということは伝えていきたいと思っています。

あとは、作品を発表していくサイクルは確実に早くなっていますね。これまではひとつのことを始めたら、そればかりに集中するタイプでした。ひとつのテーマにどっぷりと浸かるという感じ。でも受賞してからは、複数の作品を同時並行で手がけることができるようになりました。受賞作の「He is…」で作品とがっちり向き合った体験が、うまく自分の中で生かされているんじゃないかと思います。

最後に被写体の方々には、本当に感謝しています。ありがとうございました。

クロダミサト
「家族の風景」

プロフィール

1986年 三重県生まれ
2009年 写真新世紀グランプリ受賞(徳川実花運)
2010年 京都造形芸術大学情報デザイン学科写真コース卒業
2010年 東京工芸大学大学院芸術学研究科 入学

現在アサヒカメラ.netにて
「写真家の現場報告 H-アッシュ」連載中
<http://www.asahicamera.net/>

twitter: <http://twitter.com/kurodamisato>

審査員座談会

優秀賞選出審査会が行われた後の熱気が冷めやらぬ中、審査員の皆様の座談会を開催いたしました。見たその後での感想をダイレクトに、そしてざっくばらんに語っていただきました。

清水 「写真新世紀」の審査は初めてでしたが、既視感のある作品が目につきました。前回のグランプリと同じやり方の作品、つまり身近で大切な人を撮り続けたものがやたら多い、など。また、デジタルカメラはすぐにきれいな色が撮れて、簡単に作品めいたものができる。そのせいで似通ってくるということがある。

蛭川 流行みたいなのはいつもありますよね。ただ、やっている本人は案外、気づけなかったりする。私が応募した頃は女の子写真ブームだったけど、そんなこと意識もせずにやっていたし。

清水 そう、それぞれの作品はともうまいし、皆一生懸命に作っている。しかし、それが応募作品として集められたとき一つの潮流という形で見えてきてしまう。気の毒ではあります。

榎木 僕も写真に特化したコンペの審査は初めて。ただ、美術分野の審査自体はよくやっています。絵画や彫刻、インスタレーションといろんなメディアが使える美術のコンペのほうが幅広い作品に出合えるように思いますが、思いのほか多様性を感じましたね。それぞれの人がいろんな欲望を抱えていて、それを形にするために写真を使っているんだという印象です。とはいえ、何かしらの「型」が踏襲されていて、既視感のあるものも多い。選ぶときには、なるべく何も考えずに繰り返し見て、そこで心に残ったものを採っていきました。

大森 一言で言って、他人が作った枠組みを信じすぎじゃないのかな。既にあるフォーマットに乗っかって、それを疑わないというか。そういう態度からは何か驚くようなものは、なかなか出てこないんじゃないかな。

蛭川 新しい表現って難しいですよね。誰もやっ

たことないことやればエライのかといえばそうでもない。私が今回選んだのは女子高生ライフを撮った作品で、モチーフはぜんぜん新しくない。でも見ていて気持ちよかったですし、たくさん作品が並んでいる中でとても新鮮に映った。榎木さんが言うように、心に残ったんだからもうしょうがない。そりゃ「こんな見たことない!」という作品が現れて、審査員全員があっと驚かされたりすればいいけど、なかなかね。

佐内 テーマや撮っているものが古いか新しいかとかは、どちらでもよかったかな。それより、「斜」がかかっていない写真を選びたかった。透明感があるというか。せっかきれいな仕事をしているんだから、すごくきれいなものを選びたいじゃないですか。キラキラしたものね。優秀賞に選んだ作品なんかは、ガードするものが間に入っていないで、イヤな感じが全然なかった。

蛭川 自分が撮る立場の人間は、なおさら主観的な見方をしてしまうところがあるのかもしれない。**大森** これはどうやって撮ったか、そこが僕ら(写真家)にはある程度分かってしまうね。自分の写真のように見て、気持ちいいか気持ち悪いか考えたり、ちょっと憑依してしまうところがある。榎木さんや清水さんは、そういうところを気にしたりはしないでしょう。その違いはあるんじゃないですか。それが選ぶことにどう表れるかは分からないけれどね。

榎木 審査というのは、他の誰もでない「この審査員が選ぶ」のが重要であって、客観的な判断なんてないとも僕も思いますよ。その人の思考や体験が集約されて何かを選び取る、だからまずはその場でどう感じたかが大事。理由や理屈は後から付

いてくるものです。

佐内 写真に付いているコメントとあって、読んじやいますね。読んでみて、写真から飛んできたものと全然違って「あれ?」と思うことがよくあった。ああ、自分の気持ちを言いたいだけなのかなと思ったり。自分の気持ちと写真って別のものじゃないですか。そういうのはちょっと、という気がする。

清水 制作意図は読んでしまいますね。やたら難しいことが書いてあるけど、やめたほうがいい。独りよがりな意味がよく分からないことが多かった。

蛭川 それは清水さんと榎木さんに向けて、がんばって書いたんだと思うな。

榎木 しかし何と言っても先立つのは写真ですからね。いつもはこんな感じじゃないんですか?

蛭川 難しい内容が今回は多かった気がしますよ。確かに、無理して書いてもいいことはないですよ。

大森 実際に審査していると、惹かれる作品はけっこうみんな重なっちゃいますね。**清水** 人と違うものをという気持ちもあるけど、重なったりします。そういう作品には、何か捨てる難いところがあるんでしょう。いかにも新しさのある写真に支持が重なるというわけでもないけど。

大森 単なる目新しさがポイントじゃないのは確か。じゃあどんなものを求めているのか。何かに捧げられている感じのする写真っていうのは、いいと思うけどね。

蛭川 どんな写真が見たいのか、そこは審査員それぞれで使う言葉が違ってくると思う。統一した答えなんてもちろんない。あとは応募する一人ひとりが、どんな写真を見せたいか、自分で考えていくしかないんでしょうね。

写真新世紀東京展2010を開催

2010年11月6日(土)から11月28日(日)、東京都写真美術館地下1階展示室において、「写真新世紀東京展2010」が開催された。2010年度(第33回公募)の応募者1,276名の中から選ばれた優秀賞受賞者5名および佳作受賞者20名の受賞作品の展示を行った。

優秀賞は、円による循環を意識した齋藤陽道氏の「同類」、ブック作品から3枚までに絞り込んだ佐藤華連氏の「だっぴがら」、24枚の大判プリントで構成した柴田寿美氏の「beyond the universe」、さまざまな質感の素材を合わ

せた高木考一氏の「Fluid Film」、手焼きの紙焼きを切り抜いて新宿の地図にした谷口育美氏の「BEAT」。各受賞者の世界観が強く表れて、創意が凝らされた展示は来場者に各作者の思いを伝えていた。また、佳作受賞者20名による、自己を表現した作品の展示もこれからの成長を十分に予感させるものだった。

さらに2009年度グランプリを受賞したクロダミサト氏による新作個展「家族の風景」を同時に開催。「あなたはこの写真を見てどれが本当の家族だと思えますか?」と来場者に問いを投げ

かけるこの作品は、見る者一人一人を惹きつけた。今回新たに、ギャラリストやキュレーターの方などをお招きして、興味のある作品の受賞者に直接作品の批評を行う、受賞作品公開レビューが開催されたほか、受賞者がプレゼンテーションし、来場者との交流をはかるアーティスト・トークも開催された。

年ごとに関心は高くなっている、本展覧会。今回の開催期間中には、11,085人もの方が来場し、盛況を博した。



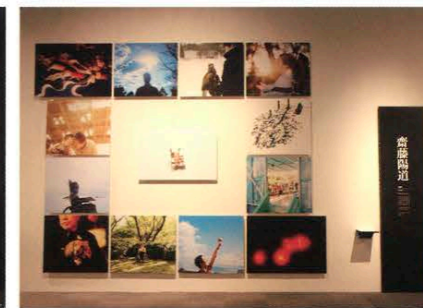
グランプリ受賞 佐藤華連氏「だっぴがら」



2009年度グランプリ受賞者 クロダミサト氏 個展「家族の風景」



写真新世紀東京展の会場入り口



優秀賞 齋藤陽道氏「同類」



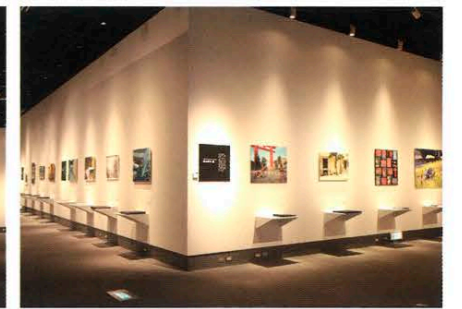
優秀賞 柴田寿美氏「beyond the universe」



優秀賞 高木考一氏「Fluid Film」



優秀賞 谷口育美氏「BEAT」



佳作作品の展示風景



写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的とした公募コンテスト。1991年に年4回の公募で始まった写真新世紀ですが、1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、33回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作品の展示や受賞者のトークショーを行う受賞作品展でも、多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

【レギュラー審査員】

荒木 経惟 (写真家) 飯沢 耕太郎 (写真評論家) 南條 史生 (森美術館館長) 森山 大道 (写真家 2002年～2007年) (五十音順、敬称略)

	応募者数	グランプリ	優秀賞	ゲスト審査員
1992年 第1～4回公募	483人	木下 伊織	岩崎 昌弥 小川 嘉朗 奥谷 佳子 オノデラユキ 今 義典 清水 麻弥 辰本 まこと 千葉 鉄也 ノニータ (谷野 浩行) 野村 浩 山本 美奈	
1993年 第5～8回公募	505人	市川 綾子	遠藤 年勇 大橋 仁 金城 民子 河野 安志 高橋 ジュンコ 土井 弘介 中山 英輔 西 光一 野村 浩 宮本 知保 茂木 綾子	
1994年 第9、10回公募	703人	熊谷 聖司	大森 克己 小倉 英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン＝クロード・ベレグー リン・デルピエール	ロバート・フランク (写真家) 坂田 栄一郎 (写真家)
1995年 第11、12回公募	456人	HIROMIX	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 バトリシア・ガバス 本田 かな	ジャン＝クロード・ルマニー (フランス国立図書館名誉コンセルバトゥール) 浅葉 克巳 (アートディクター)
1996年 第13、14回公募	587人	野口 里佳	加藤 直司 菅野 純 黒瀬 英文 蛭川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン	伊島 薫 (写真家) 椎名 誠 (作家)
1997年 第15、16回公募	537人	矢島 慎一	伊藤 トオル ヴァレリー・ブラン 慶 高城 典子 山本 香 山本 耕司	カシン・リー (写真家) 森山 大道 (写真家)
1998年 第17、18回公募	771人	柏 亜矢子	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・ジリア 藤原 江理奈 守田 衣利	ベルナルド・フォコン (写真家) ホンマタカシ (写真家)
1999年 第19、20回公募	759人	安村 崇	伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邊 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優	サラ・ムーン (写真家) 長野 重一 (写真家)
2000年 第21、22回公募	944人	中村 ハルコ	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔	横尾 忠則 (画家) 倉石 伸乃 (評論家) ジル・モラ (アートディレクター)
2001年 第23、24回公募	881人		今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西郡 友典 吉岡 佐和子	木村 恒久 (グラフィックデザイナー) 都築 馨一 (エディター)
2002年 第25回公募	1,004人	吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛冶谷 直記 SABA (高橋 宗正、中島 弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義	マルク・リプー (写真家) 東松 照明 (写真家)
2003年 第26回公募	1,150人	内原 恭彦	植本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウハイ	マーティン・バー (写真家) 鈴木 理策 (写真家)
2004年 第27回公募	1,087人	(準グランプリ) 川村 素代 滝口 浩史	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊	ケビン・ウエステンバーグ (写真家) やなぎ みわ (美術作家)
2005年 第28回公募	1,324人	小澤 亜希子	新垣 尚香 梶岡 禄仙 とくた はじめ 西野 壮平 林口 哲也+松村 康平	ウィリアム・エグルストン (写真家) 蛭川 実花 (写真家)
2006年 第29回公募	1,505人	高木 こずえ	喜多村 みか+渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ	日比野 克彦 (アーティスト) ポリス・ミハイロフ (写真家)
2007年 第30回公募	1,277人	(準グランプリ) 黒澤 めぐみ 詫間のり子 中島 大輔	青山 裕企 田福 敏史 中里 伸也	榎本 了巻 (アートディレクター) 具 本昌 (写真家)
2008年 第31回公募	1,517人	秦 雅則	岡部 東京 小山 航平 菅井 健也 保谷 綾乃 元木 みゆき	榎本 了巻 (アートディレクター) 大森 克己 (写真家) 野口 里佳 (写真作家)
2009年 第32回公募	1,340人	クロダ ミサト	Adam Hosmer 杉山 正直 高橋 ひとみ 安森 信	榎本 了巻 (アートディレクター) 蛭川 実花 (フォトグラファ)

写真新世紀

【2010年度(第33回公募)概要】

応募申込期間: 2010年4月14日～6月10日
 作品受付期間: 2010年4月14日～6月17日
 応募者数: 1,276名

【グランプリ】

佐藤華蓮

【優秀賞】

齋藤陽道、柴田寿美、高木考一、谷口育美

【佳作】

稲口俊太、澄毅、菱田雄介、松井一泰 (大森克己 選)
 赤石隆明、木築憲一、五月女久美子、佐藤航嗣 (佐内正史 選)
 牛久保賢二、菊池飛鳥、こまつのりまさ、西村美和 (榎木野衣 選)
 上山まい、内倉真一郎、刑部信人、関本幸治 (清水稔 選)
 草薨裕、小澄源太、gsex、夏野菜月 (蛭川実花 選)

【審査員】

大森克己(写真家)、佐内正史(写真家)、榎木野衣(美術批評家)
 清水稔(写真評論家)、蛭川実花(写真家)

写真新世紀誌第25号

【インタビュー・文】

山内宏泰

【表紙の作品】

「だっぴがら」佐藤華蓮

発行責任者: キヤノン株式会社

コーポレートコミュニケーションセンター
 写真新世紀事務局
 〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
 Tel: 03-5482-3904
 Fax: 03-5482-5131

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。
 © 2011 Canon Inc. All right reserved
 非売品



Canon

キヤノン株式会社

コーポレートコミュニケーションセンター 写真新世紀事務局

〒146-8501 東京都大田区下丸子 3-30-2
Tel. 03-5482-3904 / Fax 03-5482-5131
ホームページ canon.jp/scsa



本印刷物は、植物油インキを
使用して印刷されています。

PUB. NCP04 0311SZ12 Printed in Japan